
星の海の人魚姫

みなと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星の海の人魚姫

【Nコード】

N5278P

【作者名】

みなと

【あらすじ】

星の女神スマラチアは、空中散歩中、美少年ユウマと出会う。そのクールで生意気な態度にブチ切れ、神様権限で無理矢理彼の家庭教師になるスマラチア。最初は乗り気でなかったユウマも、成長と共に次第に彼女との時間を楽しむようになっていく。しかし、スマラチアにも、ユウマにも、それぞれ大きな宿命があり……。ツンデレ2人の不器用ながら懸命な、年の差ラブストーリー。

キャラクター紹介

:.・。○。 キャラクター紹介:.・。○。

スマラチア

星の女神。緩やかにウェーブする長い黄色の髪に、クロムイエローの瞳。

外見は二十歳くらい。

普段は優雅で華麗な女神様だが、ユウマの前ではテンポが崩れ、高慢で意地っ張りな態度をとってしまう。神々の中では、一番新しく誕生した女神。

ユウマ

メゼンティア王家第二皇子。蒼髪に蒼い瞳の、理知的で秀麗な面立ち。

五歳の時、スマラチアに見初められ、押しかけ家庭教師に遭う。常に沈着冷静で万能に見えるが、実は負けず嫌いの努力家。

アレス

メゼンティア王家第一皇子。金の髪に金の瞳の、澁刺はつらつとした端正な容貌。

ユウマの二歳上の兄。『剣聖けんせい』と謳われる剣術の達人。明るく寛大だが、飄々ひょうひょうとしてつかめない部分もある。幼馴染の隣国の姫ディアナを熱愛。

セリナ

メゼンティア王家第一皇女。ふわふわの紫の髪に紫の瞳の、聡明で可憐な美少女。

ユウマの三歳下の妹。華奢きゃしゃな身体に途方も無い魔力を秘める、精霊

魔術の天才。ちょっとブラコン。

＊リンボーラ＊

虹の女神。虹色の光を放つプラチナのツインテールに同色の瞳。

外見はローティーンだがスマラチアより年上。スマラチアと同様に、世界の万象を管理する『光の8神』の一人。

以下、おいおい加筆予定です♪

0 プロローグ ―邂逅

私、星の女神スマラチアがそのとき人間界に降りていたのは、ほんの暇つぶしだった。

悠久の時間を持て余して、何か刺激的なこと、ちよつとでもいいから、心を騒がしてくれる何かを見つけられないかと思って、北の王国メゼンティア上空に足を踏み入れた時――出会ったのよ。
とびきり心臓に悪い、あいつに。

広大な針葉樹の森。点在するたくさんの湖。

美しい自然に溶け込みながら、川と谷に囲まれた高台の上に築かれた、メゼンティア城下町。

賢王によつて統治された活気のある街並みも、夜の帳とほじに包まれたこの時刻は静かなもの。街灯や民家がぼつぼつと、暖かな灯りをともしていた。

頬を撫でる風が、ひんやりと冷気を帯びたものになつてきていた。緑豊かなこの景色も、暦しちごをあと二枚ほどめくれば真白に染まるのだ。

姿は人間には見えないよう消した状態で、気の向くまま空中を浮遊していた私は、その町の中心部――メゼンティア城へ足を向けた。

白い石で作られた城壁に、緑屋根。

壮麗にして堅固なメゼンティア城は、私の趣味からすればちよつと華やかさには欠けるけど、荘厳な迫力に満ちていて、人間の建造物にしてはなかなか見事なものだと思う。

その城の中でもっとも高い塔の最上階は、ところどころ設えられた柱以外の壁がぐるりと取り払われた、展望室になっていた。そこで石の床に直接寝そべって夜空を見ていた、蒼い髪と瞳をした少年が、ユウマだった。

その時、あいつはまだ五歳のガキンちよだった。

「ユウマ様、こんなところに横になられては、お体が冷えてしまいます……！ それに、もうお床につく時間はとくに過ぎてるのですよ」

戸惑ったような侍女の言葉にも、まったく無頓着。ただただ静かに、目の前に広がる果てしない宙に没頭していた。

その様子は、空に溶け込もうとするようにも、星々の囁きに耳をすましているようにも、見えた。

「ユウマ様は本当に、この場所がお気に入りですね。星にご興味がありませんか？」

侍女の言葉に、初めて、ユウマが「ああ」と小さく応えた。

そして、身を起こして、上空を——彼の目には映っていない、私の精神体をまっすぐに見つめながら、言った。

憧れを滲ませながら、囁くように、でも凜と響く声音で——。

「好きだ」

……その瞬間、あの瞳が、私の全身を貫いたのだ。

空より澄んで、海より深い、これまで見てきたどんな最高級のサファイヤより魅惑的な、あの蒼が。

気がつけば、いつのまにか、私はユウマのすぐ目の前に実体化して、佇んでいた。

侍女は茫然自失、ユウマもさすがに目を丸くして、固まっていた。

私自身も、内心慌てたわよ。私、何してるんだろうつて。

この世界ガラドゥーンには、神と精霊と数多の動植物が共存している——ってことは、人間にも周知の事実だったけど、神が人間の前に姿を現すのは異例のこと。神界の掟でも、基本的にNGってなってるからね。

でも、焦ってても格好悪いし、自分がやりたいことはわかってた。だから、せいっぱい、につこり鮮やかな笑顔を浮かべて、ユウマに言ったの。

「気に入ったわ。あなた、私のものになりなさい」

……自分でも、もうちょっと他の言い方があったと思うわよ。

でも、あいつに、今度こそ真正銘、真正面から見つめられて、情けないけど気を抜くとへたり込みじゃいそうだった。

ガキ相手に何迫力負けしてるんだってつくづく呆れるけど、あれくらいの強気でないと、もたなかった、正直な話。

「気に入ったって……どこが？」

眉を顰^{ひそ}めながら、ユウマが尋ねる。

どこ……？

どこなんて、わかんなかった。ただ、強烈に、惹かれた。それだけ。

でも、言いよどむのはシャクだった。だから、口をついて出た言葉は。

「顔」

……ま、嘘じゃあ、ないから。長く生きて（？）きたけどぶつちやけこんな美少年、見たことないってくらい綺麗な顔立ちだったし。でも、その返事を聞いた瞬間、ユウマの美しい顔は思いっきり歪められた。

そして、奴は言いやがったのだ。吐き捨てるように。

「サイテーだな、あんた」

……五歳でこんなこまつしゃくれたガキがいていいの！？
確かに人を外見だけで判断するなんて神様にあるまじき行為よ。
低俗よ。でもでも、褒められたなら素直に喜んで、五歳児！！

「ユウマ様っなんてことを……。お許し下さい、スマラチア様！！」

ようやく我に返ったらしい侍女が悲鳴を上げて、床におでこをくつつけんばかりに腰を折った。

「このお方は、星の女神スマラチア様にあらせられますよ！ ほら、先日、星の神殿で銅像を拝顔されましたでしょう！？」

「星の女神……あんたが？」

侍女の説明を受けて、ユウマがまた、まじまじと私の全身を凝視する。

なぜか紅潮する頬を、胸の早鐘を、何とか悟られまいと奮闘しながら、自慢げに微笑んでみせた私に、ユウマが投げた言葉は。

「……ゲンメツ」

……ぶちっ。

何かが弾ける音がして、私は叫んでいた。

「こんのクソガキっ！！ あんたには教育が必要みたいねっ。今後は週一回、私が直々に出向いてその生意気な態度を改めてやるわ！！」

「なっ……誰がそんな」

「神様命令だから、拒否権はありません。ちよつとあんた」

怒り狂った私にいきなり矛先を向けられて、侍女がビクツと激しく動揺した。

「そういうことから、メゼンティア王に伝えといて。週一回、私との時間を設けること。いいわね？」

「は、はいっ」

「わかった？ 逃げたって無駄よ。どこ行ったって何してたってあんたはもう私の監視下にあるんだから！ ざまーみなさい、大人舐めるんじゃないわよ、ユウマ！ バイバイ！」

そうして、あまりの展開に言葉も無く佇む二人を残し、私は闇へと再び姿を消したのだった……………ごめん、死にたい。

1・六歳——シセリア島にて

ユウマ五歳のあの邂逅^{かいこう}以来、週に一回、家庭教師に訪れることになった星の女神は、その日、出張サービス中（？）であった。

場所は、メゼンティア領シセリア島。

メゼンティア本土の南西に位置する、温暖な気候と肥沃な大地に恵まれたこの島は、毎年この季節の王家の長期休暇の滞在先でもあった。

「やっぱり、くるのか……」

決められた時刻になると同時に姿を現した星の女神に、うんざりした口調で、ユウマ。

「最初に言っただでしょ？ 『逃げたって無駄』って」

「別に、逃げたわけじゃないけど。旅行の間くらい遠慮したらどうだ？」

「週一は鉄則よ。まあ今日は課外授業ってことで勘弁してあげる。で、今は何？ 昆虫採集中？」

袖の短いシャツに、膝丈ズボンの軽装で、両手に網と虫かごを握った蒼い髪の少年は、こくりと頷いた。

「ユウマさま、みてみて、また採れたー！ー」

野原の向こうから、屈託の無い笑顔でまろぶように、一人の少年が駆けてくる。

ユウマたちが滞在している別荘の管理者の息子で、ユウマと同一年の、リゲル。

良く焼けた肌、ふつくらした頬のいかにも健康そうな少年は、ユウマの隣に佇む人影に気づき、息をのんだ。

ゆるやかにウェーブした長い黄色の髪をもつその女性は、格好こそ人間の衣装をまとうていたが、見たこともないほど美しく、まるでその場が光り輝くようだった。

「めがみさまみたい……」

ぼよん、とした表情でそういわれて、スマラチアはにっこりと上品に微笑んで見せた。

（これよこれ、これが普通の子どもの反応ってものでしょ!?!）

「だまされるな、リゲル。実態はただのヒステリー女だ」

「誰がヒステリー女よ!」

「鏡持っていないのが残念」

醒めた瞳で淡々と憎まれ口を叩くユウマを、ぐぎぎ、と齒軋りしながら睨みつけるスマラチア。

「ねえねえ、こんどはあっちの方、行こう!」

無邪気に林の方へと走り出したリゲルを目で追ったスマラチアは、彼の進路の先に生える植物に気づき、慌てて声を張り上げた。

「待って!」

ビクリ、と制止したりゲルに近寄り、彼が何気なく手を添えようとしていた木を指差す。

「スオミウルシ。この木は絶対触っちゃダメなの。この木に触ると、ぶつぶつができたり、痒くなったり、痛くなったりするのよ」

「……メゼンティアでも、似たような木を見たことある」

近寄って、じつとその木を観察していたユウマが、言う。

「小さい葉がいくつが集まって、一つの葉のように見える木だ」

「ええ、『羽状複葉』^{はじょうふくよう}っていうのよ。羽状複葉の木が必ずしもかぶれる木だということは無いけど、慣れないうちは、まずウルシ類だと疑ってみるのがいいわね」

「正確な見分け方は？ 葉っぱの付き方が、交互についているものと、同時についているものがあるだろう？ それで見分けられるとか？ それとも、葉の形を覚えるしかないのか？」

「……葉が互い違いについてるのが『互生』^{こせい}、対になってついているのは『対生』^{たいせい}っていうんだけど、この仲間は互生。その他の特徴としては……」

彼の観察眼に内心舌を巻きつつ、一通り詳しく説明してやると、ようやくユウマは満足したように頷いた。

「他にもかぶれる植物はいくつかあるし、帰ったらまた調べてみたらいいわ」

「当然。自分でも確認するのは基本だろう」

生意気な返答に、ピクリとスマラチアの眉が上がる。

なんとかこの鼻をへこましてやれないか、と眺め回して、彼の虫かごがずっと空のままのことに気づいた。

「まだ一匹も採ってないの？」

からかうように言ったスマラチアに、ユウマの反応は以前、淡泊。

「狙ってるのは、一匹だけだから」

「一匹？ 何？」

「モルフォ・ユリシウス」

星の女神の、クロムイエローの瞳が瞬いた。

「また大物を……確かに宝石みたいに綺麗な蝶うみづめだけど、そうそう見つからないし、とんでもなく素早いわよ？」

知ってる、とだけ答えて、歩き出すユウマ。

「来てたのか、スマラチア」

澆刺はつじとした声とともに不意に、どん、と背中に体当たりをされてスマラチアは小さな悲鳴を上げた。

振り返ると、金色の髪を陽光に煌めかせた少年が悪戯っぽい笑顔を向けていた。ユウマの二つ上の兄、アレス。

「うわっアレスもいっぱい採ったわね」

虫かごに踊る色とりどりの蝶に感嘆をあげると、齢八つのメゼンティア王家第一皇子は「まあな」とウインクを返し、肩をすくめた。

「ユウマのやつも、やせ我慢しなきゃいいのにな」

この少年もまた、ユウマに負けず劣らず、早熟な言動をみせる。王家の子ってこういうもんなのかしら、と苦笑しつつ、スマラチアは問うた。

「やせ我慢って?」

「ほんとはいつも採りたくてうずうずしてるのにさ。モルフォ・ユリシウスを採るまでは絶対他の蝶は採らないって思ってたんだよ、きつと。願掛けみたいなもんだ」

「なんでそこまで」

首を傾げたスマラチアに、アレスは「セリナ」と、彼らの末の妹の名を口にする。

「セリナが今回、急に風邪ひいて一緒にこられなくなったんだけど。城を出る時、自分も行きたいって泣くセリナに、ユウマが約束したんだ。『シセリア島で一番綺麗な蝶を採ってくるから』って」

「スマラチア、なんか最近楽しそうだね」

神界の、雲の上でのティータイムの席で。

話を振られて、そうかしら? と星の女神は首を傾げた。ゆるやかにウエーブする長い髪が、ふわりと揺れる。

「雰囲気、違うもん。絶対なんかあったって! 秘密なんてずるいぞ」
「ぞ」教えなさ〜い」

まるでローティーンの少女のような虹の女神が——この外見でも、実はスマラチアより年上なのだが——駄々をこねるように両手をジタバタさせて追及すると、星の女神は口元を少しだけ緩めた。

「実は最近、ちょっとおもしろい子どもを見つけたのよ」

「おもしろいつて？」

「まだ六歳なんだけど、妙に大人びて、冷静で。かといって感情に乏しいわけじゃなくて、三つ下の妹の面倒見はいいのよ。あと、やたら飲みこみが良くて、学習も運動も楽器も、何教えてもすぐ覚えるし、剣や魔法の素質もなかなかで……まあ、超！ 生意気なんだけど」

そこまで話すと、ティーカップの紅茶を一口含んだ。

先日のシセリア島での昆虫採集。結局あの日、モルフオ・ユリシウスは捕まえられなかったけれど、次の日も、また次の日もユウマは野山を駆け回っていた。

そして、滞在の最終日。空からこっそり様子を伺ったスマラチアは、とうとう彼の虫かごに閃く鮮やかなエメラルドグリーンを確認したのだった――。

押さえた口調ながら、クロムイエローの瞳を楽しげに煌かせて語る星の女神に、虹の女神がへえ〜と興味深げに相槌を打つ。

「いいないいな。そんな掘り出し物、どこで見つけたの？」

「メゼンティア。メゼンティア王家の、第二皇子よ」

虹の女神のプラチナの瞳が、一瞬だけ、ハツとしたように見開かれた気がして、スマラチアは眉をひそめた。

「……なに？」

「んん？ なんでもないよ？ そっかー。皇子ねえ、なるほど。でも六歳なんて、スマラチアってば犯罪」

「は？ そ、そんなんじゃないわよっ」

「あはは、真っ赤になってるし！ アヤシイな〜サリダードに言うてやる」

恋人の名を出された星の女神は一層動揺するように頬をひきつけ、やめてよ、と半ば本気で懇願する。

「あいつ、あれで結構、嫉妬深いんだから」

「でもスマラチアだって、その束縛が嬉しいくせに」
「からかわないでってば！」

赤面しつつ、不意に「いけない」と思い出したように席を立つスマラチア。

「仕事の時間だわ」

「逃げるんだ」

「違うつて！今日は『星読み』の日なの」

スマラチアの表情が、憂鬱そうに曇った。

虹の女神も、それまで浮かべていたニヤニヤ笑いをずっと消す。

「……そっか、がんばってね」

「うん」

唇の端を吊り上げるようにして無理矢理かたどった笑顔を残し、スマラチアは去っていく。

その後姿を見送ってから、虹の女神は頭の後ろで両手を組み、天を仰いだ。

「第二皇子……ユウマ様が。さて……どうしたものかねえ」

2・七歳 ―― 星空と雪の記憶

「何か、欲しいものはある？」

ベッドの上で荒い呼吸を繰り返す彼の額の汗を、タオルでそっと拭いながら、彼女が訊いた。

その前後のことはよく覚えていないのだけど、彼女の目は、泣き腫らしたように真っ赤で。彼も、病で衰弱している上に、ひどく、辛く悲しい気持ちだった。

「星が、みたい」

熱に朦朧^{もうちやう}としながら零れたそれは、真摯^{しんじ}な願い。

クロムイエローの瞳が、わずかに面積を広げた。何かを堪えるように、引き結ばれる唇。

「……特別、ね」

弱々しく笑ってから、目を閉じ、祈りを捧げるように両手を合わせた。ふわり、と躍り上がるウェーブを描く長い髪。

「……………！！」

その時の感動は、生涯忘れないだろう。

突如として出現した、頭上一面に輝く無数の星、星、星。

同時に、その空からひらひらと降りしきる、雪、雪、雪。

屋根と、雲が、透かされて、目の前に広がった白く輝く幻想世界。

それは、どこか儚く、胸が苦しくなるほど美しい光景だった。

彼が憧れてやまない天の星たちが降り立って、地上の悲しみを埋め尽くそうとするような。

或いは、どうしようもなく遠く離されていた愛しい魂が、その一時だけ許され、刹那の邂逅に溶け合うような。

しんしんと降り積もる、無垢なる奇跡。

「……ありがとう」

無意識に頬を濡らし、呼吸さえ忘れるように景色に魅入っていた彼に、その時囁かれたのは、感謝の言葉だった。

それは自分の台詞だろう、と戸惑いながら視線を向けると、瞳を潤ませながら微笑む彼女がいた。

じん、と染み入るような、綺麗な笑顔。

——それは、ユウマの奥深くに刻み込まれた、忘れえぬ記憶。

3・十歳——コンプレックス

ガンッガンッガッ……

メゼンティア城の中庭に、何か硬いもの同士が打ち付けられる音が響いていた。

二人の少年が、練習用の木剣で激しく刃を交えている。

彼らの敏捷性、一打一打の威力、剣の技量は、その年齢を鑑みれば信じがたいものであり、近隣諸国にその屈強さが轟き渡るメゼンティア騎士団の入団テストにも合格可能なレベルにまで達していた——思い上がるといけないという王の配慮から、彼ら自身への賛辞は極力押さえるよう城内に言い渡されていたので、本人達にその自覚はなかったけれど。

実力は拮抗^{きっこう}していたが、緩急自在に剣を繰り出す一方の少年に、もう一方がやや翻弄^{はんろう}されているようだ。

なんとか状況を打開しようと蒼髪の少年が繰り出した一撃を、金髪の少年はすっと身を落としてかわすと、横薙ぎに振り払った刃で相手の手の甲をしたたかに打ち据えた。

木剣が地面に転がり、それまで真剣そのものの表情だった金髪の少年の口元に、大きな弧が描かれる。

対照的に、顔をしかめ、舌打ちを漏らす蒼髪の少年——。

「なんか、いつにも増して無愛想じゃない？ ユウマ」

ぱちぱち瞬きする星の女神に、別に、と言だけ返して、ユウマ

は、ぷいと顔を背けた。

ちよつとだけムツとしたように頬をひくつかせ、ふーん？ と返したスマラチアは、ぐるりと部屋を見回し、壁に掛けられた彼の愛用の剣にふと目を留めた。

「今日は……久しぶりに、剣術見せてよ。どれくらい、上達したか」

その一言で、いつもあまり表情の変わらない少年の顔が、一瞬だけカツと紅潮した。

なんなんだこの女、と腹が立った。
よりによって、今？ 剣術だって？

「見てたのか？」

「何を？」

「さっきの、練習試合」

きょんとした表情。

どうやら、何も知らないらしい……にしても、妙な勘が鋭すぎる
というか、タイミングが悪すぎる……。

ユウマの唇から、重いため息が、自然に漏れる。

「……もう、剣は、やらない」

仏頂面で断言したら、心底驚いたような顔でやかましく詰め寄ってきた。

「なんで？ どうして？ ……黙ってたらわかんないでしょ！ ち
ゃんと理由を聞かせなさいよー!!」

あんまりしつこく訊いてくるから、本当は言いたくなかったけど、いやいや、応えた。

「勝てないから」

小さく、息をのむ音。

「……アレスに？」

彼がこくりと頷くと、星の女神は沈黙した。

父親であるメゼンティア王によって過度の賞賛は抑制されていたが、それでもユウマは城にいる者達がアレスを「剣聖^{けんせい}」と褒め称えているのを知っていた。

第一皇子には信じがたいほどの天賦の剣才があらせられる。あの舞の如き軽やかな動きを見たか。まるで剣もご自身の体の一部のように華麗に操られる――。

感嘆に満ちたそんな評価を耳にしなくても、兄と刃を交えるユウマ自身、よくわかっていた。アレスは、別格。

にもかかわらず、「でもさ」と、とりなすように、スマラチアは話し出す。

「彼のが年上だし、強いのは当たり前よ。子どものうちなんか、一つ歳が違っただけで判断力も運動能力も全然変わるしさ。一生懸命やってれば……」

思わず怒鳴ってしまった。

「歳とかの問題じゃねーよ！ あいつは天才なんだ！ わかるんだ。」

俺が何したって、あいつには絶対勝てない！　どんだけ努力したって、結果がみえてる！　やるだけ無駄だ！」

(……アレスだけじゃない)

ユウマの脳裏に浮かんだのは、三歳年下の妹の姿。

セリナも、天才。生まれながらに精霊たちに、愛されてる。ユウマだって、決してセンスがないわけではないと思うけれど、それでも、彼が何日もかかって取得した呪文を、初めてであっさり操れてしまう妹。

じゃあ、俺はなんだ？

どうしても、考える。考え出すと、イライラして、喉が渴いて、胸が詰まって、もどかしい。つまらない。何もかもつまらない。

挑戦的に睨みつけた蒼い瞳は、しかし、星の女神の様子を映すと、たじろぐように揺れた。

スマラチアは大口開けて笑ったり、真っ赤になって怒ったり……まったくもって「神様」らしくない、感情の起伏の激しい女神だったけれど、この時は、紙のように真っ白になって、固まっていた。

「スマラチア……？」

「あんたが、そんなこと、言わないでよ……」

一言一言、声を押し出すように、囁く。

「そりゃどうにもならないことはあるわよ。でも……結果がわかってるからなにもかも無駄なんて、あんたが言わないで……！」

状況がさっぱりわからなかったけれど、そのあまりの悲痛な響き

に、ユウマの胸もズキリと疼いた。

「……………」ごめん」

肩を震わせるスマラチアが、見たこともないほど弱々しく、痛々しくて。

逡巡しゅんじゅんの後、小声で謝ると、スマラチアの頬にやっと赤みが差し、瞳はいつもの勝ち気がにじんだ。

「……………」だいたいね、そーゆー台詞は限界までできることやり尽くしてから吐きなさいよ！ あんたはこの星の女神が見つけた一等星なんだから……………」

そこまで言つて、はたと唇をつぐみ、くるりと背を向ける。

「絶対、誰にも負けないわよ！」

「……………」

かすかに見開かれる、蒼の瞳。

全身にじんわりと広がっていく何かに戸惑いながら、言葉もなく突っ立っていたら、目の前の、ウェーブした黄色の長い髪がくるりと振り返った。

「よし、今から腹筋百回！」

「……………」は？」

ピツと人差し指を向けられながらの唐突な通達に、脱力するユウマを、スマラチアは「ほら、ばやばやしない」と急き立てる。

「基本は体力でしょ！ とりあえず毎日死ぬ気で筋トレと走りこみなさい。あと、体作りね。牛乳、肉、魚、卵に大豆。ナッツ類や牡蠣なんかも背が伸びるわよ。夜更かし厳禁、早寝早起きで睡眠時間はたつぷりと！ つーわけで膳は急げ。気絶するまでやれとは言わないから、まずは百回、いつてみよう」

「……今から？」

呆れるユウマに明瞭に頷き、スマラチアは長い髪を一つにくくると、半分をくるくると器用にお団子にまとめ、残りを邪魔にならないう長さで垂らした。

「一緒にやってあげるから！ ホラ、いーち、にー……い……」

威勢よく床に寝転び腹筋を始めた星の女神だが、なんと二回目でその顔を大きく引きつらせたものだから、ユウマは目をむいた。

「さー……」

スマラチアは必死の面持ちで三回目に向けて上体を起こすも、ぷるぷると粘った挙句、パタリと力尽きる。

星の女神の腹筋記録、僅か二回。

静寂が満ちた部屋に、ゼエゼエと荒い息遣いだけが、響き渡った。

「……………プツ」

小刻みに揺れていた肩、伏せられた少年の顔から、吹き出したような空気音が漏れるやいなや、すでに火照っていた星の女神の顔が、ますます真っ赤に色づいた。

「おまえ……ちょっと、ありえないだろ。それ……」

クククク、と込みあがる衝動を抑えきれず、とうとう爆笑を始めた彼に、スマラチアはわなわなと震えながら猛然と食いかかる。

「失礼ね！ 誰のために頑張つてやったと思つてるわけ！？ こら、笑うんじゃないわよ！ 馬鹿！」

必死の様子がまた、なんともおかしい。

一頻り^{ひん}思い切り笑つて、星の女神が本気で拗ね^すそうになる一歩手前で、ようやく真面目な顔を装つた。それでも、思い返すとまた口元がほころびそうになり、あわてて引き締める。

なんだこいつ、と思つた。

姿を消したり、空中をふわふわと漂つたり、城にいるどの学者より博識だったり。――息をのむような奇跡を見せてくれたり。確かに人間とは違う、凄い奴……かと思いきや、こんな信じられないような間抜けな一面も見せる。

「とにかく！ 私は十回目指して頑張るから、あんたは百回よ」

「どう考えても不公平だろ？」

「何事にも分相応つて物があるのよ！」

「そこでなんでそう偉そうに言えるんだ……？」

軽口を交わしながら、喉や胸に絡まっていた苦い塊がいつのまにかずいぶん和^{やわ}らいでいることに、ユウマは気付いた。

……そうだな、と内心で密かに決意を固める。

彼女の言うとおり、できるだけのは、しよう。

剣術^{アレス}にも、魔術^{セリナ}にも。
負けたくないから。

4・十二歳——少年の憂うつ（前書き）

紫の上計画進行中（笑）

4・十二歳——少年の憂うつ

自分は、あいつにとって、一体なんなんだろうと、ずっと疑問に思っていた。

ユウマが五歳の時、一方的に決められた、定期的な会合。

その日、その時間になると、ユウマがどこにいても、彼女は必ず現れた。

会合の内容は彼女の気の向くまま、さまざま。

ある時は外出……ちよつとした庭の散歩だけの時もあれば、買い物につき合わされたり、観劇したり、彼女の力でとても遠い土地へ一瞬で連れて行かれることも多々あった。

壮麗な滝やマグマ燃え滾る^{たぎ}火山口、海上で飛沫^{ひまつ}を上げる迫力の渦巻、いくつもの細枝が絡みつく巨木からなる深く美しい森……世界の絶景には何度も息をのんだ。

またある時は学習……神学、歴史学、天文学、地学、帝王学、哲学、言語学、数学、生物学、魔法学……分野を問わず幅広い範囲に渡って、城の教師が教えてくれることから更に一步深く踏み入ったことを（人間ではまだ知りえない領域まで）、多彩な実験や豊富な資料と共に講義してくれた。

ある時は体力作りのトレーニングに励み、ある時はカードやボードゲームに興じ、ある時は共に楽器を奏で、ある時はお茶をしながら他愛ない会話を交わし……。

スマラチアは、気まぐれで、偉そうで、すぐ怒るし、拗ねるし、我がままで、子どもの自分から見てもまるで子どもみたいな困った女だったけれど、彼女と過ごす時間は、嫌いではなかった……ユウマがそれを自覚したのは、ほんのつい最近になってのことだったけ

れど。

星の女神は気分屋だったが、約束には律儀で、いつも時間にさえ遅れたことはなかった。

それが、前回、来なかった。この七年間で、二度目のことだった。

一度目は、彼が七歳の時。

当時、シセリア島も含めたメゼンティア全土が恐ろしい伝染病に侵され、幼馴染のリゲルは死亡。

ユウマも罹患^{りかん}し、九死に一生をえた。

彼が完全に回復するまでは、さすがにスマラチアも会合を中止したのだが、その折はちゃんと理由を伝えてからの休会だった。

それに比べて今回は、事前の断りも、その後の連絡も一切無しの、完全なすっぱかし。

この時、初めて、この定期的な会合を、自分がそこそこ楽しんでたことに、ユウマは気付いた。

彼女に振り回されるたびに、勘弁してくれ、と思うと同時に、何が起こるかかわからず、新鮮な感覚も味わっていたのだ。

……もう、こないのかもしれない。

自室の椅子に腰掛け、肘あてに頬杖をつきながら、ユウマはぼんやりと思った。

いつも明るくて遠慮の無い星の女神だが、ごくごく稀に、何かの拍子に、ひどく苦しそうな、何か耐えるような表情を見せることがあるのに、彼は気づいていた。

けれど、それとは恐らくまた別で、ここ数回、彼女の様子は明らかにおかしかった。どこか上の空だったり、ため息を漏らしていたり、急に涙ぐんだり。

本人に尋ねたところ、どうやら最近恋人と上手くいっていない、ということだった。

しかし、もしかしたら逆に、喧嘩がきっかけとなって、愛情が深まり、彼と会うことのほうが、ここにくるよりも重要になったのかもしれない。

恋人と、ほんの十二歳のガキである自分と。

どちらと過ごす時間が大切かと問えば、答えは分かりきっているのだから。

解放された喜びも、長く続いた事柄が終わる寂しさも感じなかった。

心は、不思議と空虚だった。

時計の長針が、ぴくりと移動した。約束の時間まで……あと、一分。

「こないだはごめん！ ちょっと立て込んでね」

初めて出会った時と同様、なにもない空間から突然出現したスマラチアは、ここ数週間の物憂げな様子はどこへやら、あつけからんとして、明るかった。ちよっと前までの、彼女の普段どおり。

彼女が現れた瞬間、見慣れた光景がぐっと鮮やかさを増す。闇夜に煌く星のように、誰も目を引きつけずには置かない華やかさは、彼女の生来の気質だった。

エフォワーク

しかし、暦はすでに炎の月を刻み、汗ばむ陽気にもかかわらず、長袖、首にはストールという衣装が、ユウマの胸に、小さな違和感を与えた。神の肉体は人間よりはずっと頑丈にできてるが、それでも基本的な感覚は同じだと言っていたはず。

第一、彼女は会合の時は地上の流行を押さえた衣装をまとうて現れるのが常。着飾ることには無頓着なユウマでも、今社交界ではい

かにも涼しげな、肩をむき出しにしたドレスが一世を風靡ふうびしていることは知っていた。

「お詫びにケーキ持ってきたわ。女神の間でも絶品めいひんって評判の……」

テーブルに伸ばされた手を無言で握り、反対の手でその袖を一気にまくる。ビクリとスマラチアの体が震えたが、構かまってられなかった。

現れたのは、手首にくつきりと浮かび上がった、赤紫あざの痣あざ——強力な力で握られたような、手形。そして、腕中に無数に散った小さな紅い刻印。

息つく暇も与えず、ストールも引つ張り落とすと、首筋には、獐とう猛な歯型が痛々しく残のこされていた。

「——なんだよ、これ」

からからに乾いた喉から、搾しぼり出された掠かすれ声は、自分のものじゃないみたいだった。

胸が焼けるように熱くて、その熱が全身を燃やし尽くしそうな錯覚を覚えた。経験したことの無いほどの、激しい——怒り？

「おまえのコイビト、こんなことする奴なの？」

「……言つとくけど！ これは、今回だけだから！ ちょっと別れ話がこじれて……」

「別れ話……？」

すつ、と冷や水を浴びせられたように、火照りが引いた。わずかに冷静さが戻ってくる。

一方、スマラチアは狼狽ろうたいして、叫ぶように、言葉を継ぐ。

「そうよ！ だからもう、いいの！ 終わったんだから」

…… 本当に、別れたんだから、と急に声が小さくなったかと思うと、スマラチアのクロムイエローの大きな瞳から、ぼろぼろと大粒の雫が零れだしたものだから、ユウマはまた動揺する。外見には、かすかに目を見開いただけの変化だったが。

泣きじゃくるスマラチアを、慰めることも、大人気ないと諷めることもできず、ただ呆然と、見つめていた。

見つめているうちに、だんだん、疲労感が全身を襲ってくる。本当に、この女ときたら、普段はとことん見栄っ張りの意地っ張りなくせに、一旦堰が崩壊すると赤裸々に生のままの感情をぶちまける。あまりにも無防備に。

これが世間では恐れ多くも偉大で高雅な女神様として奉られてるんだから、やりきれない。詐欺だ。ひどい詐欺だ。

「あんだ、感情の制御もできない馬鹿な女だっと思ってるでしょ？
こんな馬鹿な女、振られて当然だって」
「思ってる」

率直に頷いたら、涙でぐしょぐしょの顔のまま、キツと鋭い目で睨みつけられた。

必死で威嚇する子猫のようだ、とつい嘖き出しそうになるのを堪えながら、「でも」と仏頂面で、ユウマは言葉を繋いだ。

「好きだったんだな。それは、わかった」

本人曰く、日夜磨いているという自慢の「玉のような肌」に、あんな疵をつけられても。

そして、治癒の精霊魔法を唱えれば治すことができるはずの傷跡

を、残しておきたい理由。

自分にはまだ理解不能だったけれど、理屈では説明のつかない類のそういう強い感情があることは、わかった。

ユウマの言葉に、スマラチアはまたわああ盛大に泣き出した。

もう、好きなだけ泣かせてやろうと思った。

さっきまで脱力していたはずが、だんだん不思議と、彼女が羨ましい気さえしてきた。

ユウマはついぞ、万事に執着という執着を持ったことがなかったから。

（俺もいつか、誰かに対して、こんなに強い感情を抱くことがあるんだろうか……いや、なくていいけど。こーゆーのは、勘弁して欲しいけど。）

ユウマが物思いに耽っている間に。

ようやく落ち着いてきたらしいスマラチアが、涙をぬぐいながら、失われた威厳を取り戻そうとするかのごとく、つんと顎を上げて、宣言した。

「言つとくけどね、私だっていつもはこんなじゃないんだからね！ あんたのせいよ！ あんたの、前だと、自分でもわけわかんなくなるのー！！」

「はあ……？」

「今日だって、もう大丈夫だと思ったからきたのに、やっぱりこんななつちゃって……馬鹿ユウマ！」

「……」

「あとね、振られたんじゃないから！ 振ったんだからね！」

「ふーん……なんで？」

あまりの彼女の言い草に、ほとほと呆れて気のない返事を返した

瞬間、しまった、と後悔した。

いつもの彼女の強がりかもしれないし、そうではないとしても、また泣かせてしまうに違いない。

焦ったように彼女を覗き込むユウマの蒼い瞳と、それは……と言
いよどみつつ、顔をあげたスマラチアの黄色の瞳が真正面から交差
した刹那。

かああああ、とスマラチアの顔が、見たこともないほど一気
に赤く染まった。うっかり、ユウマもつられて赤面してしまうほど。
完全に、予想外。

「……な、なんだよ？」

「~~~~っなんでもない！ あんたには関係ないでしょ！？」

慌てて目を逸らしながらスマラチアはブルブルと頭を振る。煌く
雫がはらはらと舞い、長い髪が、フルフルと揺れた。

「じゃなくて！ 全部あんたのせいよ！ ……今日はもう帰る！
ユウマの馬鹿——！！」

こうして。

一方的に罵^{ののし}りの言葉だけ残して、星の女神はまた一瞬で姿を消し
た。

（本当に、なんなんだよ……マジ意味不明）

深く深くため息をついた、ユウマの脳裏に、また、あの問いかけ
がぐるぐると回る。

俺は、あいつにとって、一体なんなのだろう？

「『会合』つつたつて、ほとんどデートじゃん」

剣術訓練の休憩時間。

隣に立ち、タオルで汗をぬぐっていたアレスが、なんでもないことのように放った一言に、ユウマは固まった。

花壇に腰掛け、水分補給のため傾けていたボトルから、唇を外れてつーつと一筋の糸が落下する。膝にみるみると広がっていく、染み。

「何やってんだよ」

「おまえが妙なこと言うからだろっ」

ニヤニヤ笑うアレスに、タオルでスポンを押さえながら抗議すると、二つ年上の兄は、肩に練習用の細身の剣を引っ掛けるように背負い、きょとんと首を傾げて見せた。

「だってそうだろ？ 俺が、ディアナとあちこち出かけたい、一緒に時間を過ごしたいと思うのと、同じだろ？ 二人きりの時間を過ごすことが目的だったら、それはデートだって」

「……」

ぐわーん、と頭を鈍器で投げつけられたような衝撃があった。

デート？ あいつが、俺のこと……？

しかし、思い出してみる。スマラチアの、最初の邂逅^{かいこう}で発した最初の言葉。

『気に入ったわ。あなた、私のものになりなさい』

そして、日常における彼女の傍若無人な振る舞いの数々。一方的な言動。

（いや、これはなんというか……俺……ペット、みたいなもんじゃないか？）

それが一番、しつくりくる気がした。

だって、あれが曲がりなりにも好意を抱く相手に向ける態度とは、到底信じられない。ありえない。

同時に、ペットかよ、とムカムカが込み上げる。

（あいつ……やっぱり最悪だ！）

「つとに、難儀な性格してるよな。あの女も」

「まったくだ」

知ったような口調でませた感想を述べるアレスに、全面的に同意を示しはしたが。

彼が、兄の言葉の真の意味を理解できるようになるには、まだ、しばしの時を要するのであった。

5・十四歳——華の季節

「最近、城下町まで魔物が入り込んでくることがあるんだ」

ファルファーナ

華の月。澄んだ青空に爽やかな風が渡り、色とりどりの鮮やかな花卉が咲き誇る王家の薔薇園で、ユウマの口から出た話題は暗かった。

神と精霊と数多の動植物が共存するこの世界にはまた、恐ろしい魔物たちの影もあった。

統治された領土を一步出れば、そこは奇怪な外観の獯猛^{じゆうせい}な魔物の住処でもある。剣や魔法などのなんらかの戦闘手段を持たずして未開の土地に足を踏み入れるのは、自殺行為に近かった。

とはいえ、野性の動物同様、多くの魔物たちは、人間達が暮らすテリトリーまでは滅多に侵入してこないのが常であった。その傾向が、変わってきている……。

露を含んだピンクの薔^{つばき}に手を伸ばしていたスマラチアが、その指を止めて、ため息をついた。

「魔界との結界が、世界のあちこちで緩んできてるの。私達も見つけ次第、すぐ塞いではいるんだけど……発見までのタイムロスでこの世界に入り込んできた魔物のせいで、均衡が崩れたんだと思うわ。流れ込んだ瘴^{しやう}気^きによって、凶暴化してる可能性もあるわね」

この世界にはこびる魔物たちも、元は魔界と呼ばれる闇の世界から侵入し、そのまま住み着いたもの。世界の数箇所に存在するという魔界とこちらを繋ぐ『穴』に、神々は、一定以上の力を有する強力な妖魔の侵入を防ぐ結界を張っていた。自然を司るとともに、結界補強による秩序維持が、神々の仕事というやつらしい。

「結界の緩み……新しい結界を、張ることは出来ないのか？」

「ええ。それができるのは、伝説の3神だけ。でも、彼らも、私が生まれるよりも前に、亡くなったという話よ」

「神も、命を落とすのか……」

「私達は、無敵でも万能でもないのよ」

ふと、クロムイエローの瞳によぎる影。

彼女の感情の起伏の激しさは実は大きなストレスを抱えた反動であり、高慢な態度は重圧を跳ねつける虚勢なのではないか——成長し、世の中のことを知るにつれ、ユウマはそんな想像をするようになっていたが、その真相を実際に彼女に問うことは難しかった。

彼女が垣間見せる闇は、捉えたと思っただ次の瞬間にはもう姿を消しているから。

そして、すぐに、いつものペース。

「そりゃ人間に比べたらずーっと超越した存在なわけだけど！ それこそ天地の差よね。あんたがこの私と一緒にいられるなんて、そもそも恐れ多いことなのよ！ もっと敬いへつらい有り難がりなさい」

「馬鹿じゃないか？」

「……こんの罰当たりが！ てか、罰、当てるわよ！？」

薔薇の垣根の角を道なりに沿って曲がると、向こうに、二つの影が現れた。

兄アレスと、彼の最愛の恋人、ディアナ。

アレスが人差し指を立てて何事かを口にする、ディアナがクスクスとその華奢な肩を揺らした。二人とも、幸せそうな、笑顔。

これまでユウマのほうを見ていたスマラチアが、蒼い双眸の先の彼らに気付いて、声をかけようと唇と開きかけた刹那。

アレスが、ディアナの両肩に手を添え、とろけそうな笑顔で、ゆ

つくりとその長身を屈めた。

ふわりと風がなびき、薔薇の香りが当たり一面に広がる中。
二人の、唇が合わさる。

「――」

突然の光景に数秒間、固まって見つめてしまってから、我に返り、ユウマとスマラチアは慌てて引き返した。

「び、びっくりした……」

アレスたちから十分に距離を置いた、薔薇園内でも、ちよつとした広場のようになっているスペースで。

スマラチアはへたり込むように、天使像の載る石台の淵に、半分だけ腰掛けた。

わずかに紅潮した頬を、両手で包み込むようにして冷ましている。

「そっかー。アレスももう十六だもんね。子どもの成長は早いわあ」

「あいつら、あの程度ならかなり前からやってるけどな」

「えっ。そうなの？」

「ああ、あいつが十三………くらいの時か？ アレスがやたら浮かれまくって有頂天で帰ってきたことがあった。あの時が多分、初めて」
「へえ」。確かに、めっちゃ慣れてる感じしたわ。彼、普段からエスコートが板についてるし……兄弟で随分違うもんね」

からかうような口調に、カチンときて、ユウマは冷たく返す。

「おまえ、興奮しすぎ。欲求不満なのか？」

「なっ……あんだって、キスシーン見たときは赤くなってたくせに！」

「……！」

あの二人のイチヤイチャは見慣れているといっても過言ではないのだが、今回はあまりに不意打ちだったのだ。バツが悪そうに沈黙するユウマに、スマラチアはふふん、と腕を組んでみせた。

「あんたもませた様なこと言うけど、実際は口ばかりなのよ。まだまだお子様！」

「キスしたら大人ってわけでもないだろう」

「そりゃそうだけど、やったことない奴に何言われてもね」

「一応、あるぞ」

「えっ。いつ誰と!？」

「……昔、セリナと」

急に怖いくらい真剣な顔で問い詰められ、何事かと戸惑いながらも応えると、星の女神は鳩が豆鉄砲を食らったような顔になった。……かと思えば、ゲラゲラ笑い始めた。

「あはははは、何それ。そんなの数に入らないわよ。おつかしー。

……あんたって、なんつーか、遊び心がないっつーか、石頭の朴念仁じゃない。生真面目っての？ 感情に乏しい冷血漢だから、そもそも恋愛感情つてのに無縁っぱいし、女に手を出す度胸も……」

安堵あんどの気持ちから、調子にのってつい悪口雑言あくぐさげんごを並べるスマラチアの上に、不意に、陽光が遮られるように影が落ちた。何事かと視線を上げると、石像の、自分の頭の上になる位置に片腕を置き、覆いかぶさってくる秀麗な面立ち。

「……ほら、別にどうってこと」

ため息のような呼吸を一つ漏らしてから、身を離れたユウマは、そこで絶句した。

スマラチアの両の瞳からは、大粒の涙がボロボロと零れ落ちていた。

（なんでこんなキスくらいでおまえいくつだよってそういえばこいつ実際のところ何歳なんだ初めて会ったときから全然年とってないとか考えてる場合じゃなくてだってどう考えても今のは挑発してただろいやしかしいつはその場の勢いだけで不用意な言動を放つことがあるかだがそんな泣くほど下手だったのか俺のはとかそんなことはともかくとしてこの状況で今すべきことはなによりもまず）

「……ごめん」

内心大パニックを起こしながらもユウマが殊勝^{しじやう}に謝罪の言葉を告げると、スマラチアは涙をぬぐい、「ごめんじゃないわよ！！」と^{まなじり}眦を吊り上げた。

「あんた……あんた、最低！　こんな子に育てた覚えはありません！」

「……ごめん」

こいつに育てられてたのか俺は？　と甚^{はなは}だ疑問に思いながらも、再び素直に頭を下げるユウマ。

スマラチアは両の拳をぶるぶる震わせながら、取り乱したように言葉を継ぐ。

「……つとに信じられない！　こんな見境なく……言つとくけど！　これは涙じゃなくて、冷や汗だから！　有りえなさ過ぎて、変なところから冷や汗出たのよっ！　女の敵！！」

さすがに冷や汗はないだろ、と突っ込みたい欲求を堪え、でも泣くくらいシヨックだったんだよな、と心底すまない気持ちになる。

「……ごめん」

「何度も謝らないでよっ！　虚しくなるじゃない！！」

真っ赤に染まった顔をぷいと背けて。

肩を怒らせて去っていくスマラチアの後姿を黙って見送ったユウマは……凹んでいた。

（そんなにシヨック受けるほど……嫌だったなんて。）

「見てしまいました……」

「！？」

不意に耳に飛び込んできた沈んだ声音に、ユウマは弾かれたように振り返った。

薔薇の垣根の角にいつの間にか立っていたのは、彼の三つ年下の妹、セリナ。

ふわふわの紫の髪を肩まで垂らし、利発そうな大きな紫の瞳をもった周囲が華やぐような美少女——なのだが、この時は、いつもの潑刺とした空気はなりを潜め、どんよりと淀んだオーラを醸しだしていた。

「見たって……どこから？」

口元を僅かに引きつらせながら質問したユウマに、容赦の無い妹の回答。

「キスしてるところから」

「~~~~」

俺達がアレス達のキスシーンを見て、セリナが俺達のキスシーンを見て……てなんだこの兄弟リレー、と内心頭を抱えるユウマを、セリナは死んだ魚のような半目で見つめる。

やがて、その桜色の唇から零れた言葉は。

「見損ないましたわ」

「……！」

前々から怪しいとは思っていましたが、だからそれとなく目を光らせてスマラチアさんに牽制けんせいはかけておりましたのに……とこの辺の妹の呟きは、シヨックの余り頭が真っ白になった彼の耳には届かなかったけれど。

「まさかお兄様からだなんて！ 仮にも教師と教え子でしょう、不潔ふけつですわ不埒ふうちですわ破廉恥はれんちですわー！」

「待て。別に俺達はおまえが思ってるような関係じゃないし、今日はたまたまあいつの言い草にムカついてちよっと驚かせてやるつもりで……」

なにか勘違いしているようなので釈明したところ、妹の口は呆れたようにぽかんと開いた。

そして、あからさまに眉をひそめ、止めの一言。

「最低ですわ」

最低ですわ最低ですわ最低ですわ……（↑エコー）

グラリ、とよめきそうになる身体を必死で持ちこえた彼の脳裏に蘇ったのは、さっきの彼女の泣き顔。

ただ面倒くさいと思っていた最初の頃と違い、彼は星の女神との会合の時間をいつしか楽しみにするようになっていた。

そんなそぶりを彼女に見せるつもりは絶対になかったけれど、教養の深い彼女との交流は彼の知的好奇心を満足させてくれたし、単なる軽口の応酬も、なぜか不思議と心地のよいもので――スマラチアもなんだかんだ言いつつ、自分との時間を満喫しているように思われた。

……だからまさか、あんな反応をみせるなんて。

「まさか泣くほど嫌がるなんてな……」

「……………」

罪悪感と、もう一つ、彼自身よくわからない何かで酷く落ち込むユウマ。

一方、セリナはしばし何ともいえない表情で沈黙してから、深々とため息をついた。

「今、私、心底スマラチアさんに同情しましたわ」

「だから反省してるって……」

いつも沈着冷静な次兄が珍しく、どっと疲れたように肩を落とすその様を見遣りながら、妹は苦笑とともに呟いた。しみじみと。

「ユウマお兄様も、大概鈍感ですわよね」
「……？」

一方、スマラチアはそれからしばらくの間、ともすれば緩みだす口元を引き締めようと悪戦苦闘の日々を送るのだった――。

5 十四歳——華の季節（後書き）

ユウマ、いじめてゴメン（笑）

6・十六歳——すれ違い

12の暦の最終月——審判イシユベイアの月。

「……おまえさ、今日の服、どうかと思うぞ」

チエスに興じている最中、わずかに顔をしかめながら放たれたユウマの一言に、スマラチアは意表をつかれたように二回、瞬きをした。

ユウマが服装についてどうこう言ってくるなんて経験、この十一年で初めてのことだったから。

さてではどんな服を着てきたかしらと見下ろしてみれば、デコルテラインがクリーム色の小さな薔薇を模したコサージュで囲まれた、水色のドレス。足元はビジュのついたハイヒール。

センスを疑われるような服装……ではないと思うのだが。

「この薔薇、嫌い？それとも、この色？」

「違う。そんなんじゃない……あきすぎだろ」

視線をそらし、仏頂面で、見えてる、とぼそりと漏らしたユウマの言葉に、スマラチアはようやく合点がいった。同時に、ぷつと吹き出す。

「平気平気。これが最近の流行でね。下着の肩紐と胸元の黒のレースは、わざと見せるようにしてあるの」

「はあ？ 下着見せてどうするんだよ。頭おかしいんじゃないか？」

「なっ……」

辛辣しんらつな言葉の鞭むちに、スマラチアの頬が、紅く染まった……のも束

の間、彼女は気を取り直したように余裕たっぷりの態度で、ふふんと立ち上がった。わざと谷間を強調するように、腕を組みながら。

「そんなこと言って……目のやり場に困るって正直に言ったらどうなのかしら？」

「……付き合いきれない」

「こらっ逃げるな！」

ため息をついて席を立ったユウマを行かせまいと、後ろからガバツと抱き付いて。
そこで。

(……やばい)

スマラチアは、固まった。

もう少し彼が小さい頃は、しょっちゅうこんな風にからかつて、もつれ合って、髪をくしゃくしゃにしたり、頬をつついたりしてたのだ。

でも、久々に腕を回した彼の身体は……柔らかかった少年時代とは、別物になっていた。

そつえば頭の位置も、全然違う。

晴れ渡った空のような蒼は、いつのまにか、彼女を簡単に見下ろせるくらいの高さにあった。

……匂いも、違う。

(やばいやばいやばいやばい)

ふざけてただけなのに。からかってやろうと思ったただけなのに。体温が上昇し、鼓動が痛いくらい、警報を奏^{うず}でる。体の芯が、疼くような感覚。

……本格的に、やばい。

「おまえ、いい加減に……」

振り返り、半ば本気で怒っていたユウマは、そこで台詞を飲み込んだ。

自分を見上げてくる、スマラチアの、顔。

泣き出しそうな、熱に浮かされたような……今までに見たことのない、表情で。

切なげに光るクロムイエローに魅入られ、振り払おうとしていた腕の力が抜けたその瞬間、グッと両手で頭を引き寄せられる。

何、と思う間もなく、唇を――塞がれていた。

「おい……スマラチア……？」

顎に、首筋に、胸板に……唇を這わせながら、彼女は彼の服を暴いていき、自らもするすると衣を落とす。

白い肌が、眩しい。魅惑的な滑らかな曲線が、誘うように視界で揺れる。

立ち上る、甘い香り。

いつもの高飛車なそぶりからは信じられない、従順な姿で跪き、長い髪を揺すっていた彼女が、チラリ、と彼の様子を探るように上目づいた瞬間、何かが弾けとんだ。

優しい愛撫なんて、知らなかった。

ただ抱き潰したかった。

何もかもが熱くなりすぎて、必死のくせにぼんやりしていた。

自分が触れるたびに身を震わせ、どんなに荒々しい仕草にも歓喜の吐息で応える彼女を前にして、靄のけぶるような頭に浮かんだのは、今までの彼女の言動の数々。

『あんたのせいよ！ あんたの、前だと、自分でもわけわかんなくなるの！』

意味深な兄の笑み。

『つとに、難儀な性格してるよな、あの女も』

苦笑して漏らした、妹の呟き。

『ユウマお兄様も、大概鈍感ですわよね』

——もしかしたら、こいつは。本当は。本当に。

「……ユウマあつ」

全身を艶やかな薔薇色に染めて、瞳を潤ませる彼女は、くらくらするほど美しかった。

熱い。

苦しい。

息がうまくできない。

痛い。

切ない。

——愛しい。

うわ言の様に彼の名前を繰り返し呼ぶ彼女の声が、眩暈めまいを増長させる。

互いの汗の香りが、情熱を加速させる。

わけがわからなかった。

ただ、全身で自分を求める彼女が、可愛くて、愛しくてたまらなかった。

そして。

いつまでも震え続ける彼女を抱きながら、わかった、と思った。全部、わかったような、そんな気がした――。

夢見心地で朦朧もうちゅうとしていたスマラチアは、耳に滑り込んできた彼の声で、ハッと我に返った。

「スマラチア……」

ほんの少しだけ鼻にかかったような、中低音。

愛想のかけらも無いくせに、どこか甘いその声で名前を呼ばれるたび、痺れしびが奔るはしような感覚を覚えるようになったのは、いつからだっただろう。

でも。

「大丈夫か？」

そっと触れられた瞬間、スマラチアは弾けるように身を起こし、その手を逃れた。

手早く、身支度を整える。

なんてことをしてしまったんだ、と羞恥しゅうちと後悔でいっぱいだった。とても目を合わせられない。混乱していた。

「スマ……」

「ごめん！ 本当にごめんなさい」

深々と下げられた頭に、ユウマは眉をひそめた。

「なんで……謝るんだよ」

「だって違うの！ 私、魔が差したって言うか！」

こういう行為がしたくて、ずっと見てきたわけじゃない。それをわかって欲しかった。

「あんだと、こういうこと、したかったんじゃないの！ 初めて会った時、とにかくおもしろい子どもだって思っ、ガキとは思えないほど冷静で頭の回転速くて、教えたことなんでもどんどん吸収していくし、むかつくことも多かったけど、他ではないくらい刺激的で、ただ会うのが楽しかったの。ううん、楽しいだけ、なんかじゃなかったけど……でも本当に、こんなつもりじゃあなかったの……今日も、ちよつとからかってやるつもりで……」

「からかう……」

腰を曲げたままのスマラチアには、悲痛に歪んだユウマの顔は、見ることができなかった。

ただ、その両手が強く握り締められたのだけ、視界に映る。

「ひどいことして、ごめんなさい。まさか、本気になるなんて、思

わなくて」

——抱きついただけで、自分がこんなに抑えられなくなるなんて、
そういう意図で発せられた言葉は、まったく別の解釈を持って、
彼の胸に突き刺さった。

「……………！！……………」

「殴っていいよ。それで、できればこのことは忘れて……………」

顔をあげたスマラチアは、どこまでも鋭く凍てつかせるような蒼
の瞳に圧され、息をのんだ。

無表情の中、そこだけ爛々と底冷えするように光るサファイアに
蠢くのは、怒りと、悲しみと——絶望。

「……………最低だな、あんた」

吐き捨てるように投げつけられた言葉は、出会いの時と全く同じ
台詞だったけれど——。

「……………ごめんなさいっ」

震える声で一言告げると、スマラチアは、姿を消した。

「……………ざけるなっ……………！！」

ユウマが吠えて、テーブルを蹴り上げると、ガラス製だったそれ
は、けたたましい音と共に脆くも倒壊した。粉々になった煌く破片
の中、チェスの駒が散乱する。

「……………」

握り締めた拳は、力を入れすぎて、爪まで真っ白に染まっていた。全部、わかったと思ったのに。

全部、思い違いだった？ 自分の、独りよがりだった……？

視界の端に、何かキラリと光るものが飛び込む。

大振りのビジューがついた華奢なハイヒール。

それを手に取り、思いっきり投げつけようと手を振り上げて……ぐ、と唇を噛む。

口内に広がる錆びた鉄の味が、わずかに、冷静さと呼び覚ました。握ったままの靴をぎこちない動作で胸の前まで下ろし、じっと見つめる。

存在感を放つビジューの輝きは華やかだったが、危うげな細いヒールと華奢なつくりは、どこか彼女を連想させた。

「……………莫迦ばかやろう……………」

呻くと、彼はそのヒールを握る手にグツと力を込める。強張ったその頬に、一筋だけ、細い軌跡が流れ落ちた――。

7・インテルメッツォ——天上の囁き

ひろびろとした、吹き抜けの空間。

中空のところでどこに、刻一刻とその色彩を変える、オーロラが実体を成したかのような質感のカーテンが流れるようにかかっている。

光源はなく、まるで漂う粒子自体が輝いているような、明るいのに不思議に朧おぼろな、清浄な気配に満ちたその場所に。

凜と響く、複数の男女の声。

「ほころびがこんなに……」

「時が、迫っている」

「彼らを、覚醒させよう」

「いや、もう少し……もう少しだけは……」

「……そうね」

「スマラチアには、そろそろ伝えるべきなんじゃないか？」

「賛成。あの娘も安定してきたと思うし」

「だが、そう思った矢先、先日あの不始末だろう？」

「秘密くらいは守れるでしょう。まるで除け者みたいだったから、あの子もいつまでもどこかで私たちに一線置いてるのよ」

「彼女には、謹慎が解けたら、私から伝えましょう。みんなは、今までどおり、ほころびの修復に当たってちょうだい……」

了解、の声とともに、いくつもの影がすつつと消えた。

後に残ったのは、他のものに指示を発していた、夜空を思わせる濃藍の髪を背中に流した艶冶えんやな女性と、光の反射によって様々な色を見せる不思議なプラチナの髪をもつ、ローティーンの少女。

「……あの方々に、もう少しだけ、平穏な時を過ごさせて差し上げ

たい。これは、甘すぎる感傷なのかな、ミネリシス」

その幼い外見から発せられるのは不似合いなほど苦渋の滲む声に、名を呼ばれた女性も、哀しげに、瞳を伏せた。

「そうかもしれない。でも、私も、願ってしまふ。あんなに壮絶な道を歩まれてきたのだもの……せめて、今だけは」

「……………」

落とされた沈黙に込められるのは、無垢なる時への切なる想い。やがて彼ら自身が、逃れられない宿命に導かれるその日までは……どうか。

しかしその『宿命』の開幕は、まさしくその目前にまで迫っていた——彼らにとって、最悪の形をもって。

8・十六歳——氷の季節？

北の王国メゼンティアの、冬は長い。

広大な針葉樹で覆われた北部は一年の半分は氷雪に閉ざされ、日照時間も一日の三分の一ほど。吐息も凍りつきそうな極寒だ。

王城の聳^{そび}える南部になると、大分気候も穏やかになるが、それでも陰影^{シエスタイムール}の月の下旬になると初雪が舞い始め、それから短くても三ヶ月ほどの間、大地は真白に覆われる。

氷の月。
^{メアマシユリ}

一年を通して最も厳しいこの時季に、明け方、くぐもった風景を駆ける一つの影があった。

規則正しい呼吸音と共に、白い煙が後ろへ流れていく。

移動のリズムに合わせて、揺れる蒼髪。

理知的な印象を与える秀麗な面立ちの中、蒼穹^{そうきゅう}の双眸は熱にけぶり、どこか虚ろで無心だった。

軽快な速度で、凍える外気を引き裂いていた発熱する長身が、湖畔にさしかかった時、その足をわずかに緩めた。湖面を見つめる瞳に、光が宿る。

長くて幅広い翼が、後部を膨らませて優雅に飛翔している。黒の羽毛の中、頭頂部から羽軸にかけて、腰やすねが純白。大型で湾曲した黄色いくちばしに、オレンジがかった黄色の後肢。

ホクオウワシ。非常に稀少な鳥類だった。最後に見たのは、何年前だったろうか。

スケートをしにきた時、目撃したのだ——スマラチアと。

鋭い痛みが胸を刺した。

唇を噛み締め、再びスピードを上げる。

針葉樹に囲まれた白い道をどこまでも走り続けると、やがて、堀に囲まれた堅固にして風雅な、巨大な石の城壁が見えてくる。

大手門までたどり着くと、彼のランニングペースに応じるように絶妙のタイミングで跳ね橋が下り、門扉が解放された。

敬礼する守衛や城壁の見張り塔の弓兵たちに軽い会釈を返し、入城。

広い中庭に点在する厩舎^{きうしや}、鍛冶場、厨房……それぞれが、忙しく仕事を始める気配がする。

灰色の空が朧^{おぼろ}な光を帯びて輝きを増す中、静寂から徐々にざわめきが広がっていく夜明けのこの雰囲気、ユウマは好きだった。

主城の扉の前に、たたずむ人影を見とめ、ユウマは眉を寄せた。
おもむろに速度を緩め、静止する。

腰を屈め、ハッ、ハッ、と軽く呼吸を整えてから、その人物に視線を合わせた。

「母上……何をされてるのですか。このような気候の中では、お体に障ります」

「あら……大丈夫ですよ。今出てきたところですよ」

毛皮のショールを纏^{まと}ったソフィア王妃は、いつものようにゆったりと微笑んだ。

「馬丁のジュードに聞いたの。明け方のランニングでユウマ皇子は毎日必ず、礼拝堂の鐘が二つ鳴る時、この城に戻ってくるって……
本当にびっくり、鐘二つね。貴方らしい」

くすくすと笑いながら、ふわりと巻かれた栗色の髪を揺らすソフィアは、上は十八歳から下は十三歳までの、三人の子持ちには到底見えない。

透けるような白い肌には、勿論多少のしわは見られたが、ほっそりとした姿態に、どこか夢見るような雰囲気を持つ、幾つになっても少女のような趣おもむきのある人だった。

「今日は儀式の日でしょう？　なんだかしみじみしてしまって……小さい頃は兄妹でも一番病弱で、すぐ寝込んでいた貴方が……あら、大丈夫よ……ありがとう」

息子から、彼の着ていたマントを肩にかけられ、ソフィアは小さく肩を竦すくめた。一瞬、くすぐったそうな笑みが閃く。

「……こんなに遅くなるなんて、これこそトレーニングの成果かしらね。よっぽどの吹雪でもない限り、雨にも負けず、風にも負けず、誰に課されたわけでもないのにもう何年も……でも、そういう一ヶ月程前にしばらく途切れた時期があったのでしょう？　皆、大騒ぎしてましたよ。皇子の身にいったい何が……って」

「……戻りましょう」
ほんわかしした口調で語る母に、詮索する気など毛頭ないことはわかっていたが。

ユウマの口から零れたのは、自分でもハツとするほど冷たい声音だった。

ドーム型の大きなホールの中央。
暗闇の中、ほのかな光をまとうて、彼女は浮遊していた。

瞳は固く閉じられ、両の手は胸の前で組まれている。ふわふわと広がる、長い黄色の髪。

ホールの上部は、まるで天球儀のように、いくつもの星が輝いていた。

部屋のどこにも投影機などは置かれていない。天上にあるのは本物の煌き……宙の、縮小版が、そこにあった。

空間には、様々な色彩の大小の惑星のような球体が浮かんでいる。床は、一面、泉だった。

——せうくまへ 星宿の間。

星の女神にして、運命を読む女神であるスマラチアのみ、入室を許される神秘の部屋。

神々の統治に関わる未来を占う空間であり、個人的な使用は禁止されていた。

……けれど。

スマラチアは、いらだたしげに吐息を漏らした。宙を舞っていた髪が、力を失って背中を覆う。

私的な利用は厳禁……だからだろうか。見えない。こんなに祈っているのに。

インキュベシア

審判の月のあの日以来。どうしても仕事に身の入らなくなった彼女は、同僚の神々——「光の8神」の決定により、現在、反省を促す謹慎処分を受けていた。

神界の館に閉じ込められて、そろそろ一週間になるだろうという今朝方。

突然全身を襲った恐ろしい悪寒。脳裏に過ぎったのは、蒼い幻。彼の身に、尋常でない何かが、起こる——。

先読みの性質を持つ彼女には、星宿の間にはいないときでも、大災

害の前などはこういった類の予感が訪れた。そういう時は、すぐに他の8神に知らせて、協議に移る。

ただの人間、たった一人の運命についての予知は、初めての経験だったが……不思議には思わなかった。彼女は、常に彼のことを想っていたし、彼は人間ではあったけれど、彼女にとって特別な存在だったから。

昨夜、面会に来てくれた月の女神ミネリシスが、もう少しで解けるから辛抱なさい、と言ってくれたけれど。

こんなことをして、ばれたら、今度は謹慎などではすまされないだろうけれど。

動かずにいらなかった。なんとか、しなければ。

（集中、するのよ——）

詳しいことがわかれば、彼の身を襲う災厄も避けられるかもしれない。今、それができるのは、自分しかないのだ。

彼女から零れていた光の粒子が、次第に蒼白く輝き始め、ほしくず星屑のように宙を彩る。

長い髪が流れるように泳ぎ、天の星芒せいぼうが歌うように瞬く。

泉の中心から、波紋が広がる。ゆっくりと湧き起こるその間隔が、徐々に早くなり、強くなってきた刹那——。

澄んだクロムイエローが、大きく見開かれた。

華やかな造りのその面は、蒼白で、強張っていた。

細かく振動する紅い唇をきゅっと結ぶと、星の女神は、その場から瞬時に姿を消した。

一連の自主鍛錬をこなし、浴室で汗を流した後、ユウマは、別城の一階の王立図書館へ足を向けた。

年代物の、ややきしむ扉を開けると、奥の長机に、見慣れた小柄な姿があった。

文字を追うのに没頭し、彼が入ってきたのにも気付いていない。

「セリナ」

声をかけると、三歳下の妹は弾かれたように顔をあげ、紫水晶の瞳を細めた。

「ユウマお兄様！ おはようございます」

空間がパツと輝くような、可憐な笑顔。ふわふわの柔らかそうな紫の髪が、肩先で揺れた。

「今朝は何を読んでるんだ？」

「王家の歴史書です……立派なご先祖様が沢山いらっしゃいますけど、中にはとんでもない王族もいたようで、びっくりしましたわ」
「……アルジエトリエント」メゼンティアか」

ユウマは小さく吐息を漏らした。メゼンティアの表の歴史には登場しない、血塗られた姫。

三百年前に処刑され、その存在は闇に葬られたはずだが……綿密に、いくつかの書物を辿ると、そこに抹消の軌跡が見出せる。地下の書庫深くまで潜れば、彼女について記載された歴史書が、一冊だけ残されていた。ただし、全文難解な魔法文字での記述だったが……。

「よく見つけ出したな、そんな古い本」

「あら。お兄様だって、ご存知だということは、ご覧になったということでしょう?」

無邪気に瞳をくりくりさせるセリナに、ユウマの唇がかすかに綻んだ。

確かに自分も、同じ年頃でこの書物を発見したが、その時はこんな魔法文字と格闘してまで真実を追究する気は起きなかった。セリナは、自分以上に好奇心旺盛で、恐ろしく賢い。

だいたい、ユウマが調べたのも、去年、自主的にではなく、スマラチアが出してきた学習での課題で――

「お兄様……?」

不安そうに呼びかけたセリナに、なんでもないと小さく首を振る。

聡明な妹は、即座に話題を転換した。

「いよいよ《十七の儀》の朝ですわね。北の祠にただ一人で赴き、司祭様の介添えの下、聖杯を叩く……ユウマお兄様でしたら、険しい早駆けも道中の魔物の襲撃も、なんの問題もないと思いますけど、今は一番厳しい季節です。どうぞ、お気をつけて」

「……ああ」

メゼンティア王家に代々伝わる、男児の成長に伴う儀式の一環。誕生月に行く決まりになっているのだが、確かに、厄介な時季に生まれてしまったと思う。

「誕生月になると日の出と共に自然に満たされる、聖杯……どんなお味だったか、教えてくださいね。アレスお兄様は、ほのかに甘かったとおっしゃってましたけど」

「一緒だろう」

「わかりませんよ？ 甘いと思って飲んだら、すっごく苦くて、吹きだしそうになるかも！」

悪戯っぽく唇をすぼめるセリナに、ばか、と苦笑して、奥の本棚へ向かおうと身を翻したユウマは――そのまま、硬直した。いつのまに現れたのか。

視界の中央に、一ヶ月と少しぶりの、彼女の姿。

ひどく顔色が悪く、少し痩せたようにも見える星の女神は、喉の奥から搾り出すように、小さく彼の名を呼んだ。

8 十六歳 ― 氷の季節？（後書き）

以降、シリアスモード突入です。

ユウマはトレーニング馬鹿という設定。

煩惱紛らわすのにもいいもんね（爆）

先日はたくさんの拍手をありがとうございました！ 感激です。

評価、感想等もお待ちします。

9・十六歳——氷の季節？

ユウマに知らせなければ——その思いだけでメゼンティア城に跳んだスマラチアだったが、いざ数メートル先に彼の姿を見ると、大きく鼓動が躍動した。

とても顔向けできず、定期会合も休み続けていたから、会うのは本当に久しぶりで。

彼だ、とそんな場合ではないのに、全身が歓喜で震えた。しかしそれも一瞬で、次にフラッシュバックしたのは、最後に見た、冷たい眼差し。

軽蔑の滲む、瞳。

（怖い……！）

またあの視線を受け止めるのかと思うと、血の気が引く思いがした。

自分の醜態を思い出すと、身がすくんで、居たたまれなくて、引き返してしまいたくなる。

（逃げちゃ駄目！ ユウマが、危ないんだから……！）

勇気を振り絞って呼びかけようとしたが、からからに乾燥した喉から漏れたのは、ひゅう、という掠れた音だけだった。

まるで呪縛でも受けたかのように、声が声にならない……。

と。

彼が、振り返った。

妹に向けていた笑顔が、こちらを見て、瞬時に立ち消えた。

彼は、まだ、怒っている。当然だ。
でも、逃げちゃ、駄目。

「ユウマ……話を、聞いて欲しいの」

「……からかった、ただだったんだろう？」

睨み付けるような瞳で、でも、その中に深く傷ついたような色を見て、スマラチアは愕然とした。この時、ようやく気付いた。
大きな誤解が生じている、という事実。

「そ、そうだけど、違うの。からかった、ていうのは、その、最初に私が抱きついたことで……」

行為そのものを指すわけではない、と言いたかったが、セリナが存在が気になって、言葉を呑み込む。

「あの……えっと、紛らわしい言い方してごめんなさい。でも、そういう気はなかったのに……」

言いかけて、これも、誤解を生んだのかも、と気付き、ますます焦燥が募った。

「……ていうのも、別に、そういうことをしたいと思ってないという意味じゃなくて、その、あんたはまだ子どもだし……」

あやふやな言い回しばかりで、戸惑うように眉をひそめていたユウマが、この台詞で痛みに耐えるように一瞬顔を歪ませたので、スマラチアはパニックに陥る。

自分の舌を噛み切りたかった。なんでこんなに余計なことばかり

言ってしまうんだろう。そのくせ、なんで大事なことで、舌足らずなんだろう。

話せば話すだけ、齟齬そごが広がっていくような恐怖に震えた。でも、絶対に、伝えなけきやいけないことがある……！

「ごめんなさい、今は、そんな話をしにきたわけじゃなくてっ」

——ダン！

心臓が止まるかと思った。

図書室を劈つんざいた、激しい衝撃音。

古い机に、刻まれる、ひび。

拳を強く握り締め、うつむいたまま、ユウマが呻く。

「おまえにとつて、それが『そんな話』程度なら……もう、話すことは、ない」

「……………！！」

去っていく背中に、手を伸ばしたけれど、言葉は出なかった。ただただ、涙だけが、とめどなく溢れる。

そうじゃないのに。違うのに。

どうして、私はいつもこうなんだろう。

彼を傷つけるようなことしか、言えない。

大事なことが、伝えられない。

情けなくて。惨めで。やるせなくて。

消えてしまいたかった。……泡のように、あとかたもなく。

「……ご馳走様です」

「もう……終わりなの？」

朝食にスープを半分食べただけで席を立った息子に、ソフィアが心配そうに問いかけた。

「果物はどうかしら？ 南国から届けられたオレンジは？」

結構です、と言い残して、さつさと扉を開けて出て行った弟を目で追っていたアレスが、そっと、隣の席のセリナに囁いた。

「なんかあったのか？ 超機嫌悪い……」

たまたま至近距離で皿を代えていたため、その言葉が耳に入った給仕係は、きょとんとしたように第一皇子の顔を伺った。

第二皇子は基本的に物静かで沈着冷静、今も彼の目にはいつもと別段変わった風には見えなかったのだ。食欲があられないようだから、お体の具合がよろしくないのだろうか、と気遣わしくは思っていたが。

「先ほど、スマラチアさんがいらっしゃったんですけど……」

耳打ちしながらも口ごもる妹に、ふーん、と頷きを返して、アレスはベーコンを一口で頬張る。

「ご馳走様」

「アレス。貴方も……？」

「大丈夫です、母上。昼には倍食べますから」

ウインクを残して、足早に食堂を去る。

「……ユウマ！」

自室のドアに手をかけていた弟を呼び止めた。

振り返った煩わしそうな顔が、ハッと目を見開いた。至近距離に、細身の剣先。

「まだ出立まで時間あるだろ？ 久しぶりに、打ち合おうぜ」

ニヤリと笑いながら、アレスが言った。

針葉樹林の奥深く、吹雪の舞う中に立つその小さな祠は石造りで、開き扉を開けると、正面に大神ディヌルマドラムを象徴する紋章が描かれていた。

スマラチアは、創世神と謳うたわれるこのディヌルマドラムに会ったことはない。

彼女の生まれる遙か昔に起こった第一次神界大戦の後、大神は三人の神にその身と魂を分断した。

そのディヌルマドラムの分身である三神も、スマラチアの生まれる以前の第二次神界大戦後に没したという話なのだ。

彼女は、現存する神々の中でも、一番最後に誕生した女神だった。

——その、大神の紋章の下に、聖杯が置かれていた。

中に、なみなみと、澄んだ液体が湛えられている。

精巧な紋様に彩られた、透き通ったガラスの赤が美しい。

しかし、それを見た瞬間、スマラチアの全身に鳥肌が立った。

（やっぱり。呪いが、かかってる……）

神秘の祠に近づけるのは、聖なる神々と、ディヌルマドラムの祝福を受けたメゼンティア王家の血を引くもののみのはずなのだが。

深呼吸してから、両手をかざす。

蛍のような光が星の女神の全身から零れ、聖杯を取り巻き——大きく弾けた。

スマラチアも、突き飛ばされたように後方に倒れこむ。

ゾツと全身が凍るような震えが走ったのは、受け止めた雪の冷たさのせいだけでは決してなかった。

神である自分でさえ、太刀打ちできない、強力な呪い？

——星宿の間で、くつきりと映った映像。

聖杯を叩る、彼の姿。

その表情が、瞬間、衝撃に染まり、苦悶に満ちたものへと歪む。硬く冷たい、無機物と化す肉体。

ふりそそぐ、悪魔のような、高笑い——。

『運命は、変えられない』

いつかの、月の女神の諭すような声が、耳にこだました。

一斉に蘇る、心奥に無理やり押し込めていた、いくつもの記憶。

痩せこけて骨と皮ばかりになった人々。

噴火する山と激流する溶岩。

容赦を知らない怒濤の津波。

崩壊する大地。

一瞬で飲み込まれるかけがえのない営み。

苦悶と呻きと嘆き。

絶望。

『なんで、わかってるのに、どうして止められないの!?!?』
『変えられないし、変えちゃ駄目なのよ』

——そんなことない。
そんなこと、あつてたまるか。

揺れていた星の女神の瞳が、キッと負けん気に煌いた。
なにがあっても。今度こそ。
彼だけは、絶対に、助けてみせる。

10・十六歳——氷の季節？

広々した西の中庭に、激しい金属音が鳴り響いていた。
裂帛れっぱくの気合をもつて、金と蒼が躍動する。

互いに剣を交差させ、流し、突き、かわし、凧なぎ、受け止め、弾き——運動神経の塊と化して、全身を解放する。

アレスに誘われた時は面倒に思ったが、なかなか悪くなかった。どうやら自分は、暴れたかったらしい。

かすかに唇を吊り上げたユウマに対し、アレスは眉間を寄せた、硬い表情だった。打ち合い直後から、変わらない。

普段は朗らかな彼が、剣を握ると別人のように冷静になるのはいつものことだが、今日はどうも様子が違った。自分から言い出したくせに、切り結んでいても、どこか、つまらなそうに見える……。

ギインギイン……ギイン！

ユウマの連続の剣戟けんげき。頭上で横に掲げた剣でグツと最後の一撃を受け止めたアレスが、剣を返して刃を流すと同時に足を蹴り上げる。ユウマが背後に飛びのくと、すぐ眼前の空を刀身が切り裂いた。油断なく剣を構え直すユウマ。

一方、絶好の攻勢に転じたはずのアレスは、それ以上追及しようとはせず、小さくため息を漏らすと、首をコキコキと鳴らした。

ぼつりと、言う。

「おまえが色々苦しんでるってのはわかったけど、さ。結局おまえは、どうしたいんだ？」

「……なんの話だ」

「いつも、スマラチアの気持ちかわからない、て悩んでるみたいだけど。おまえ自身の気持ちはどうなんだってこと」

淡々とした口調ながら、挑むような金の瞳で見据えられ、ユウマの身体がカツと熱を持った。

「何も知らないくせに、勝手なことを……！」

切りかかった太刀をギイン、と受け止めたアレスが顔をしかめる。すかさず振り下ろされたユウマの第二打を回転することなかわして間合いをとると、痺れる右手から、左へと武器を持ち替えた。口の中でばやく。馬鹿力。

「……最近、星を見ることあるか？」

黙れ、と言いたげに眼光の鋭さを増したユウマに構わず、アレスは続けた。

「天気悪くて見えないことが多いけど、たまに見えても……弱々しい光しかなくて。くぐもって見えるんだ。俺には、スマラチアが、泣いてるように見える」

「……………」

「俺なら、ディアナを泣かせるようなことは、しない！」

唸るように宣言すると、金糸が揺れた。これまでとは段違いの、俊敏な動き。

二歩で踏み込んで、上段から一撃。

「チッ」

ユウマは鍔で引っ掛けるようにして刃を下に流すと、突きを繰り出す。今度はアレスがそれをあしらい、淀みない動作で右肩から

斬りつける。

身を沈めることでかわしながら、起き上がる動作で左下から斜めのユウマの斬撃。それも弾かれ、右に刀身が煌いた、と思った瞬間、変則的な下からの突き。

なんとかいなしたが、焦りが残ったまま袈裟に切りかかった刃は、重心が甘かった。

ユウマの剣は、絡めとるように翻されたアレスの刀身の上を、掲げられた鰐側から切っ先までまるで操られるように下方へと滑った。シャーツと鋭い摩擦音。

思わず体勢が崩れる。すかさず鳩尾に、柄頭による強烈な一撃。

吹っ飛ばされたユウマを、寄せ集められていた雪のクッションが受け止めた。

「ちよつと、頭冷やしとけ」

そっけなく言い残して、アレスは去っていく。

痛みをこらえて瞋られていた瞳を開くと、灰色の冬空。ちらちらと、白い羽根が舞い始めたところだった。

(……なんで、あの流れで突きが出せるんだよ……！)

クソッ、と呻きながら、ユウマはだらしなく弛緩していた足を、片方、引き寄せた。

半身を起こし、立て膝をつくような状態で、唇を噛む。

何年も間近で見て、何百回と打ち交わしてきているのに、兄の自由奔放な剣は、未だどうしても把握しきれない。

それどころか、逆に毎回、痛いほど思い知らされるのだ。アレスの、桁違いの、剣才を――。

『あんたはこの星の女神が見つけた一等星なんだから……』
『絶対、誰にも負けないわよ!』

「……どうして」

ふわふわと降り積もる小雪の中。
片膝に顔を埋めたまま、発せられた声は、擦れていた。

「思い出すんだよ……」

10・十六歳——氷の季節？（後書き）

わりと趣味に走ってしまった兄弟対決（汗）
いつも拍手をくださる方、ありがとうございます！

11・十六歳——女神の過去？

（ユウマの外套は……これね）
がいつ

彼の個室にやってきたスマラチアは、掛けてあったコートのポケツトに、警告の手紙を滑り込ませた。

読んでももらえないかもしれないけど、できることはやらねばならない。

直接話そうとしても無理なのだから、あとは、伝言か、人に止めてもらうこと……。

予見された場面を思い起こす。

聖杯をおるユウマの横に、たたずんでいた影。

神官らしき、老人の姿。

見覚えがあった。確か、司祭の、ベルギス。

トントン。

ノック音が鳴り、スマラチアは息をのむ。しかし、扉の向こうにいるのがユウマでないことは、気配でわかった。

逡巡しゆんしゆんの後、留まることを選択する。

「失礼いたします……きゃっスマラチア様!？」

入ってきたのは、侍女のエルザ。ユウマと初めて会った時も一緒にいた、顔馴染みだった。

掃除にきたらしい彼女は、誰もいないはずの部屋の人影に肝を冷やしたが、長年ユウマの傍に仕えていただけあって、星の女神の神出鬼没ぶりには慣れていた。

呆れたような息を吐き、たしなめるように、言う。

「プライベートの侵害ですわよ、スマラチア様」

「非常事態なのよ。エルザ、お願いがあるの。ユウマに伝言。『祠ほこりには近づかないで。聖杯に、呪いがかかってる』。お願い、絶対伝えてね！」

「は、はい」

エルザが戸惑いながらも頷くと、星の女神は「絶対よ！」と念を押してから、姿を消した。

相変わらず、忙しい御方だ……とつい苦笑しながら、伝言の内容を反芻する。

呪い、とは穏やかではない。掃除は後回しにしても、皇子を捜して伝えなければ。

突然教会に現れた星の女神を、司祭ベルギスは驚嘆の思いで出迎えた。

星の女神に会うのは初めてではなかった。大神ディヌルマドラムに仕える神官として最高位に近いところにあるベルギスは、以前、儀式の折、光の8神全員とわずかながらだが顔をあわせた経験があった。

しかし、今日の儀式を止めて欲しい、ユウマ皇子が危険なのだ……ひどく焦燥した様子でそう訴える星の女神は、あの時の、近付きがたいほど神秘的な威厳をまとうていた高雅な彼女とは、まるで別人のようだった。

（この御方が……あの、スマラチア様？）

恐れ多くも疑念を抱いてしまったが、そういえば、と思い直す。
メゼンティア王家に第二皇子の侍女として仕える孫娘から、聞いたことがあった。

『ここだけの話、スマラチア様って、全然女神様っぽくないのよ。もちろん、色々と思議なことはできるし、すっごく綺麗で、オーラがあるんだけど、ユウマ様と一緒にのを見ると、普通の女の子って感じ』

不敬なことを言うものじゃない、と諫めたら、孫はこうも言っていた。

『ああ、確かに、他の人の前じゃいかにも女神様って感じに、優雅でお上品に振舞われてるのよ。きつとあっちが「公式」のお顔なのね。でも、ユウマ様絡みになると、我を忘れちゃうみたい。まあね、確かにうちの皇子様は、神様でも恋しちゃうくらい素敵だと思うわ……』

誇らしげに、頬を染めるエルザに、まったく一児の母にもなっていないまでも妙にキャピキャピしたところのある娘だと脱力したものだが……。

「約束しなさい！ 儀式を、中止するのよ！」

取り乱したように詰め寄る星の女神に、ベルギスは、返事に窮した。

神のお言葉を疑うなど、恐れ多いにも程がある。しかし、もう一つの過去の経験が、彼の心を惑わせていた。

九年前。光の8神の筆頭である、月の女神ミネリシスが現れ、彼にこう告げたことがあったのだ。

『これから数日のうちに、もし、星の女神が現れて、何か要求したとしても、決して従ってはならない。彼女は禁忌を破ろうとする可能性がある』

結局、その時は星の女神は現れなかったが……神といえど、全てが絶対ではないのだと知らされる忘れがたい記憶となった。

神々の中でも、最後に生まれたという星の女神。

運命を予見するという、その大きな能力は、まだ神としては未熟なところのあるこの女神に大きな枷^{かせ}となり、彼女の精神を不安定にしているのだと、耳にしたこともあった――。

反応の鈍いベルギスに苛立ったように、星の女神はドン、と拳で机を叩いた。

髪は乱れ、顔色は蒼白。見るからに必死で、とても冷静には、程遠い。

「なんで……答えないの？」

声を荒げる星の女神に、ベルギスは、重い口を開いた。

「誠に恐れながら――なにとぞ、不敬をお許しください――スマラチア様がユウマ様を見初められたのは、皇子が御歳五つの砌^{みぎり}。その時分、メゼンティア王に、定期的に皇子と会合を持つと契約を成され、その期限が、十七歳だったと伺いました」

十七の儀を持って、星の女神と皇子の楔^{くさび}は、絶たれる。
星の女神は愕然^{がくぜん}としたようにその身を強張らせた。

「——恋狂いした女神が、個人的な事情で儀式を止めようとしているんじゃないかって？」

「万に一つの、可能性として、申し上げたのです」

顔を歪め、ぶるぶると震えていた星の女神は、やがてうつむき、大きく息を吐いた。

力を抜き、次にこちらに向けた眼差しは、鬼気迫るほど冷酷なものだった。

「……………中止しないというのなら、大きな災厄を、貴方と貴方の周りのものにもたらしめます」

ベルギスの呼吸が、一瞬止まった。

昏い瞳で、女神を見つめ返す。

全身に広がっていくのは、途方もない、失望。

「今のお言葉で、私の心は決まりました。貴女様に従うわけには、まいりません」

敬虔な老司祭の、低いけれどきつぱりとした宣言に、スマラチアは、両手で顔を覆った。

「……………ごめんなさい」

消え入りそうな謝罪の囁きを残し、女神は、逃げるようにその場を去った。

出立の時刻が迫っていた。

「ユウマ様、見なかった？」

「さっき、アレス様と西の中庭のほうへ行かれていたわよ」

中庭……と胸の中で呟き、小走りで廊下の赤絨毯あかじゅうたんを踏みしめる。

てつきりまだお食事中かと思っていたけれど、食堂にはすでに皇子はいらっしゃらず。その後、あちこち探して回っているうちに、予想外に、時間が経ってしまった。

大人しく、部屋で待つてるべきだったかしら……と唇を噛かんだエルザを、不意に、大きく取り乱した声が呼び止めた。

「エルザ！」

振り返った先には、メイド仲間の一人。青ざめて、息を弾ませている。

「どうしたの？」

「イリアが……イリアが！」

ただならぬ様子の同僚の口から飛び出したのは、最愛の一人娘の名前。エルザの血が瞬時に凍った。

「イリアが、暴走した馬車に轢ひかれて、大怪我がいとつしたって！ 早く行
つてあげて！」

用意されていた衣装に着替えたユウマは、最後に外套がいとつに手を伸ばす。

「ユウマ様、今日は特別な儀。こちらをお召し下さい」

控えていた召使が恭しく差し出したのは、メゼンティア王家の紋章が豪華に刺繍された、美しい真紅のマント。

ユウマは頷いて、それを羽織ると、部屋を後にした。
残された外套のポケットの中の、折り畳まれた手紙には気づかないまま――。

『運命は、変えられない』

星宿の間で集中していたスマラチアは、打ちのめされたようにな垂れた。

暗示されたのは、変わらぬ未来の悲劇。

（やっぱり、どうしても、駄目なの……？）

失意に沈む彼女の脳内に、苦い痛みとともに蘇るのは、九年前の、あの出来事――。

「もう嫌なの！ わかってるのに、ただ見てるだけなんて、もう耐えられない――！」

ヒステリックに喚くスマラチアを、月の女神はブルー・ムーンストーンの静かな瞳で見据えた。

『シセリア島の住民百五名、強い感染力を持つドラハン病で全滅』

星の示したさだめは、この時もまた残酷なものだった。

シセリア島は、メゼンティア領の離島であり、王家の子どもたちが長期休暇を楽しむ馴染みの土地であった。別荘管理者の息子であるリゲルは、皇子達とも歳が近い幼馴染で、星の女神も前年、一緒に昆虫採集をしたのだった……。

「司祭のベルギスに神託で伝えましょう？ 最初の感染者が出た時点で、隔離かくりすれば……」

「無駄よ」

ミネリシスは、濃い藍色の艶やかなぶりをゆっくり振って、スマラチアの提案をあっさり斬り捨てた。

「なんで、わかってるのに、どうして止められないの！？」

「変えられないし、変えちゃ駄目なのよ。私たちにできるのは、見守ること。そして、崩れてしまった均衡を、できるだけ早く回復するよう、促すことだけ」

スマラチアよりもずっと昔に誕生したという月の女神は、諭すように、言葉を紡いだ。

光の影響に応じて青白く輝く神秘的な瞳からは、なんの色も読み取れない。

「貴女も、知っていたはずよ。……だから言ったのに。人間に、深入りしないほうがいいって」

「……………！」

もう、何回も、予言をして、悲惨な運命を目の当たりにして。限界だった。

ユウマ達と一緒に蝶を追いかけていた、輝くような少年の笑顔は、鮮やかにまぶたに焼きついていた。

（ほっとくなんて、無理よ……！）

スマラチアは、せめて彼らだけでも……とリゲル一家を、伝染病の広がる以前に、メゼンティア本土へ移動させた。

しかし、その結果。メゼンティア全域に伝染病は拡大し、一家も全員、死亡したのだった――。

11・十六歳——女神の過去？（後書き）

徐々にですがお気に入り登録をしてくださる方が増えていて、すごく嬉しいです。

いつも拍手をくださる方も、本当にありがとうございます。励みになります…！

12・十六歳——女神の過去？

雪が、次第に激しくなっていく。
身を切りそうに、凍えた空気。耳の感覚は、とうにない。

道中の氷原で、襲い掛かってきた雪男の巨体を一刀の元に切り伏せたユウマは、立て続けに火精霊^{エリオード}を召還し、岩場の陰に燃え盛る火炎球を放り込んだ。

直後、赤茶色と黄土色のまだらな毛並みの三つ目の狼数匹が、悲鳴と共に飛び出してくる。攻撃の隙を窺って身を潜めていた、魔狼^{まろう}達だ。

怒り狂って飛び掛ってくる敵を、冷静な太刀さばきで危なげなく全て片付けると、傍らで大人しく待機していた愛馬に再びまたがった。

向こうに見える針葉樹林地帯を突っ切って、切り立った崖を越えた先の永久凍土の森の中に、教会が見えるはずだった。

革の手袋に包まれた指に力を込め、手綱を振る。

睫毛に舞い降りた氷の欠片を、まばたきして払う。

フードや肩にしきりと降りかかる雪は、移動のスピードに負けてその多くが後方へと滑り落ちていった。

極寒の白く染まった平野に馬を走らせながら、ユウマの胸に去来するのは、彼女の面影ばかり。

『おまえ自身の気持ちはどうなんだってこと』

形の良い唇が、皮肉げに吊り上った。

そんなこと、もうとっくに気付いている。

自覚したと思ったら、失恋したのだから。

……でも。

しょっちゅう病魔に冒され、寝込んでいた少年時代。いつも、人知れず部屋に届けられていた、花や、書物。

恋人と別れたという時、その理由を問うてみたら、意表を突かれるくらい赤面して。

『~~~~なんでもない！ あんたには関係ないでしょ！？』

戯れのキスの後の、はらはらと零れ落ちていた涙。

『言つとくけど！ これは涙じゃなくて、冷や汗だから！ 有りえなさ過ぎて、変なところから冷や汗出たのよっ！ 女の敵！』

明るくて遠慮がないくせに、意地っ張りで、本音を言わない彼女。感情を持て余しているようで、口下手で、不器用で。

——あの時も、そうだった？

『ユウマ……話を、聞いて欲しいの』

後悔が、胸をえぐった。

必死そうだった。あんなにやつれて、苦しそうで、きつと必死に勇気を奮い起こして、きてくれたのに。

自分も辛くて。

彼女を前にしているのが、しんどくて。

『あんと、こういうこと、したかったんじゃないの』
『まさか、本気になるなんて、思わなくて』

あんな宣告くらったら、完全におしまいだろう？

わからない。やっぱり全然、わからない。

……それでも。

今度会いにきてくれたら、話を聞こう。

俺も、彼女も、感情を表現するのが苦手だけど、下手でももどかしくても、がんばって話をしよう。

怒って悪かったって謝ってから、自分の気持ちを、ちゃんと、伝えてみよう――。

軽率な振る舞いで被害を拡大させてしまった……仲間達にも激しくなじられ、何より自責の念に打ちひしがれた九年前のスメラチアが、無意識のまま辿りついたのは、ユウマの部屋だった。

夜遅くで、もう寝てるだろうけど、顔だけでも見たい……ぼんやりそう思っていたのだが、様子がおかしかった。

ランタンが灯されたベッド脇で、マスクを装着したソフィア王妃が、タオルを洗面器につけていた。漏らされた重いため息から、色濃い疲労が見てとれた。

そして、ベッドの上には、荒い呼吸を繰り返す、痩せたユウマの姿……。

（ドラハン病――！）

息が、止まるかと思った。眩暈で、倒れそうになる。

「……スマラチア様」

ソフィア王妃が、目を見開いた。両の瞳から、みるみる涙がわきあがる。

「お願いします！ ユウマを助けてくださいまし！ 大丈夫ですよ？ この子、助かりますわよね！？」

「……！」

スマラチアの唇から言霊が零れ、王妃はふっと意識を失った。召還された眠りの精が、彼女をしばしの安寧の時へ誘ったのだ。

王妃をそっとソファーに横たえ、スマラチアは、ベッドに駆け寄った。

「ユウマ……」

恐る恐る呼びかけると、幼い彼の眉間のしわが、ほんのわずかが、緩んだ。それでも、まだ息は激しく、顔色もすこぶる悪い。

「……スマラ、チア……」

呻くように、漏らされた言葉を聞き取ろうと、長い髪を押さえながら、耳を寄せた。

「何？」

「リゲルも……ドラハン病、なん、だって。あいつ、俺より、ちびだから……大丈夫、かな？」

「……あんだ、あんだ、何言ってるのよ、そんな、苦しそうで、ボロボロのくせに！ 人の心配してる場合じゃないでしょ！？」

「教えてくれ……母上も、エルザも、だれも、教えてくれない、んだ。リゲルは、どうしてる？ おまえは……知ってるん、だろ？ スマラチア……」

玉のような汗を浮かべ、全身の痛みをこらえながら。祈るように請われて、スマラチアは、顔を覆った。
たまらなかった。

「ごめん……ごめんなさい。私は、なにもできなくて。ただ、見るだけなの。ごめん、ごめんね、ユウマ。ごめん……」

弱い自分が嫌だった。

何もできない自分も、こういう時に、こらえられず泣いてしまう、どこまでももろい自分が、どうしようもなく嫌だった。

無力感。

挫折感。

絶望感。

うつむいて、長いこと、肩を震わせていたスマラチアの手に、不意に、小さな熱い手が、重ねられた。

乾いた唇から、ぜえぜえと全身で呼吸を継ぎながら。

噴き出す汗に髪を湿らせ、ぐったりと横たわったまま。

力を振り絞って震える手を伸ばし、彼女を見上げる、蒼い瞳。

高熱に浮かされ、意識さえ朦朧としているような状態にもかかわらず、その瞳は、不思議と澄んで、壮絶なまでの揺るぎ無い意志の光を宿していた。

——負けないから。

雄弁と語る、強い瞳。

「俺は、絶対負けない、から。だから……」

彼がいたから、やってこられた。

目の当たりにする不条理に押しつぶされそうになりながらも、がんばってこられた。

どうしても、助けていの。

どうしたら、助けられるの？

違う未来を、見せて――。

大きくうねり、舞い上がる黄色の波浪。

青白い光の粒の乱舞。

無限に広がるような宙の空間に、無数の光耀こうようが集まった、紫、青、緑……さまざまな色彩の星雲の如き現象が、生じては消えていく。

泉の中心から絶え間なく湧き上がっていた無数の同心円が、突如として、炸裂したように大きく水を弾いた。

スローモーションのように降りかかる霧雨を、顔をあげ、両手を広げて受け止めながら。

星の女神は、閉じていた瞳を、静かに開く。

泣き笑いのような顔で、呟いた。

「……なるほど、ね」

12・十六歳——女神の過去？（後書き）

今年最後の更新です。

ここまでお付き合いくださってありがとうございました。

まだまだ勉強中で拙い点も目立つと思いますが、

精進したい！という気持ちは強いので、どうぞ来年もよろしく願います。

良いお年を

13 十六歳 ― 闇との対峙？

森の中の教会で出迎えた老司祭は、氷雪に濡れそぼったフードを下ろし、マントを脱いだユウマを見て、感じ入ったようにため息を漏らした。

「お会いするのは二年ぶりになりますか。いや、ご立派になられました……どうぞ、火の傍へ」

パチパチと薪のたきぎはぜる大きな暖炉の近くに案内され、湯気の昇る熱い茶をふるまわれると、ユウマも徐々に心地ついてくる。肘掛け椅子に身を委ね、ほっと弛緩しかんした。

ふと、視線をやった司祭が、何やら迷いつつ口ごもっているような気がして、眉をひそめた。

「……なにか、懸念事でも？」

「いえ……。それにしても、殿下も災難であらせられますな。儀式にあたる月が、氷の月とはメアマシユリ」

「聖杯の水も、凍っているということはありますか？」

彼にしては珍しく冗談のつもりで言ったのだが、真顔では伝わらなかったらしい。司祭は「ご安心ください」と至って大真面目に応じた。

「聖杯の水は、神秘の湧水ゆづい。外気の状態に影響を受けることはございませんし、仮に零しても、中の水を飲み干すまでは不思議とまた湧いてくるといわれております。また、その周囲は大いなる力に守られ、近づけるのは聖なる光の神々と、大神の祝福を受けしメゼン

ティアの皇胤のみ……」

呪いなど、かけられるはずがないのだ。
ベルギスは、苦い思いで胸中に呟く。

「……スマラチア様は」

司祭の口から予想外の名が飛び出し、ユウマの体にハッと緊張が走った。

「彼女がなにか？」

落ち着いた口調ながら、どこか硬い声を鋭い目線ともに返され、ベルギスも内心動揺する。

「いえ、私も大神にお仕える身となつて早六十年余り……司祭という身に余る役職にまで就いておりますが、偉大なる神々に拝顔する機会は滅多にございません。しかし、ユウマ殿下は星の女神様と頻繁な交流が在らせられると伺いましたので、果たして、どのような御方なのかとふと興味を抱いた次第でございます」

ベルギスの説明に、納得したように頷いたユウマは、しばし沈黙した後、ふと目を逸らした。

零された言葉は、まったく感情の読み取れない、簡潔極まりないもの。

「私にも、よくわかりません」

優に十年以上は交際のある相手を語るにはあまりにそつけない、まるで興味のかけらもないようなその物言いに、ベルギスは、

なるほど、と一人得心した。

この皇子は、星の女神のことをよく思っていないのだろう。やはり、先ほどの女神の尋常でない言動は、片恋の苦しさによるものだったに違いない……。

「こう申すと不敬極まりないのでしょうが……大いなる力を有し、自然界を統^すべる神といえど、何も悟りを開^すかれていないわけではないようですな。まるで人のように、葛藤^{はんもん}し、煩悶^{はんもん}し、時には過ちを起こされることもないとはいえない——？」

ぼつぼつと語るベルギスに、ユウマはコクリと明解に頷いた。

「ええ。それは、そのとおりだと思います」

再びマントをまとい、ベルギスの先導で、吹雪の中を進む。木々が多少の防波堤の役割を担ってくれるが、依然として、視界は悪い。やがて、ようやく祠^{ほこり}が見えてくる——というところで、前に行く老人の足が止まった。

「そんな……なぜ……」

呻くような声と共に、ガタガタと震えだし、ガクリと膝をつく。

「ベルギス！？ どうした……」

屈みこんだ司祭の向こう、絶え間なく舞い散る雪にけぶった視野に映ったのは、扉が開かれた石造りの小祠^{しょうじ}と、その傍らに佇む二つ

の影。

一人は、結い上げた艶やかな緋色の髪に濡羽色の瞳の、見慣れぬ女。毛皮で作られた、太腿をむき出しにした露出度の高い衣装にガーターベルト、革のロングブーツというなんとも奇妙な外観だが、何より、ユウマに違和感を与えたのは、全身から醸し出されるその気配。

（なんだ……この、禍々^{まがまが}しさは……！）

その姿が目に入った途端、寒さから生じるものとはまた別の鳥肌に襲われ、体中の毛が逆立つような感覚を覚えた。

しょっちゅう城を抜け出しては、ふらりと冒険の旅にでる兄アレスほどではなかったが、ユウマも野外で魔物と対峙^{たいじ}した経験はこれまで少なからずあった。

しかし、眼前の女を取り巻く魔力は、かつて屠ってきた雑魚とは到底比べ物にならない、桁違いの代物であった。

そして、影の残る一つ。

それは、女性を模^もした、氷の彫像だった。

腰まで波打つ長い髪、両手で胸を押さえるようにわずかに身を屈めるその姿勢といい、無表情なのにどこかひどく悲しげな美しい面立ちといい、まるで命を宿すかのように感情に訴えてくる迫力ある氷像——それはあまりにも、彼の心を占めて離れない、彼女の姿に酷似していた。

「……スマラチア？」

独白するかのように呆然と言葉を漏らす彼に、緋色の女はその顔

に溢れんばかりの喜悦を滲ませた。

「会いたかったよ——イシユリード」

「イシユリード……？」

初めて聴く固有名詞のはずが、妙に耳に馴染むような、心の奥の何かをくすぐるような、不可解な感覚をもたらす単語だった。

戸惑う彼に、緋色の女はウフフフ…と笑みを零しながら、やけに媚びるような舐めつける視線を向けてくる。

「二百年間、忘れた日は一日もなかった……その凍てつくような眼差し、匂い立つような高貴、均整のとれた鍛え抜かれた肉体に凜然とした完璧な美貌！ 禁欲的なのに抑えようもなく滲む鮮烈な青い色香！ ……ああっああつたまらなあ——いいいい」

軽く指を折った掌を差し伸べ、ビクンビクンと痙攣けいれんしながら息を荒げる女に、変態か、と内心で思いつき引きながらも、侮りがたい魔力は厳然としてそこにある。ユウマはいつでも抜刀できるように左手を劍柄に添えながら、いたって冷ややかに、切り捨てた。

「人違いだ」

「ああっその辛辣な物言いもゾクゾクするう！ 人違い？ ありえないよ。まさかメゼンティアの血統に転生していたとは思わなかったが……やはり、妾とおまえは深い縁で結ばれているらしい！」

「生憎こちらはおまえなど欠片たりとも知らないし、今後も一切関わりをもつつもりはない。だが、そっちの氷像については、質問にこたえてもらおうか」

途端に、興奮の坩堝るつぼにあったような女が、スツとつまらなそうな表情に変化した。

「これが。これは、単なる出来損ないよ。忌々しい小娘が邪魔をし
くさって……」

「どういうことだ？」

ひしひしと押し寄せるような、嫌な予感を必死に否定しながら、
ユウマは鋭く問い詰める。

「妾はこの二百年、おまえに会いたくて会いたくて仕方がなかった。
次にあいまえることが叶ったらどうやって、苛め！ いたぶり！
苦しめ！ さいなみ！ 犯し！ 虐しいたげ！ 戮なぐり殺してやるうかと
！ 毎日毎日毎日毎日そればかり考えていた……！」

ハアハアと息を荒立てながら、どこかうつとりしたように語って
いた女が、ふと、淋しげに目を伏せた。

「しかし、ある時ふと気付いた。そのめくるめく瞬間は最高に甘美
だろう、それは間違いないけれど……殺してしまつては、もう愛で
ることができないではないか！」

いやいやをするかのように、激しく頭を振つてから、再び濡羽色
の瞳がユウマに焦点をあわせる。潤みを帯びた、じつとりとまとわ
りつくような眼差し。

「妾はおまえが大大大大だあい好きなんだ。だから、この聖杯に、
ちよつとした仕掛けを施した。中の液体を飲み干したものが不老不
死になるまじない……氷の彫刻として、美しいまま永遠に妾ととも

に生きられるように!!」

「お……お許してください」

ベルギスがひざまずいたまま、地に頭が触れそうなほどうな垂れた。

「スマラチア様は、ご存知であられたのです。聖杯に呪いがかかっている、必死でご忠告くださったのに、私は……悪意あるものがまさか、この聖域に近づけるはずはない、と……」

「ほう……となると、この小娘、わかって飲んだのか？」

酔狂な、と苦々しげに吐き捨てる女。

一方、ユウマは、一気にその顔を蒼白に染めていた。

“わかってて”

“飲んだ”

——この氷像は、本人？

だが、なぜ、彼女が飲まなくてはならなかったのだ？ 狙われたのは、自分だったはずなのに。

いや、そもそも、彼女が氷像になったなんて、このいかれた女の戯言なんじゃないか？

信じたくない。信じたくなかった。しかし、全否定するには、あまりにも、その彫刻は、真に迫りすぎていた。

見開かれた瞳から、はらはらと涙が伝っているような。

薄く開かれた唇から、苦悶の呻きが漏れているような。

見ているだけで胸が締め付けられる、その圧倒的な存在感は、彼に、逃れることのできない残酷な事実を突きつけていた。

「――」

喉の奥から湧き起こったのは、まるで、獣のようなり。

緋色の女が、何事かと首を傾げる。

猛る肉体と精神を努めて制しながら、今度は言語になるよう、吐き出した。

「――戻せ」

その蒼の瞳に宿るのは、灼爛の激昂。剣を抜き放つ手が、全身が、

抑えきれない怒りに震える。

未曾有の憤怒に染まった彼を見やり、女は狂喜するように瞳をギラギラと輝かせた。

「素晴らしい！　こんなに感情を露にするおまえが見れるなんて……」

……そうだね、やはり、ただ氷漬けにするだけではつまらないっ！

まずは絶望に歪むおまえの顔で、生き地獄にもがく悲鳴で、妾を恍惚の境地につれていってええええ！――」

13・十六歳——闇との対峙？（後書き）

あけましておめでとうございます。

いつも閲覧、拍手、ありがとうございます。

感想やメッセージ、評価などもお待ちしております。

14・十六歳 ――闇との対峙？

「！」

飛び出した女のスピードに、ユウマは目を疑った。繰り出された右の拳を、身体をひねることかわしたが、それも辛うじて――風圧で、衣服の腹部が鋭く裂けた。立て続けに、蹴技と拳の連打。とっさにガードした右腕がみしりと嫌な音とともに激痛を訴える。

（受けるのは無理か…！）

回避に移るが、エッジがかすめ、頬に紅い流星が刻まれた。

「おっと」

女が表情をしかめ、攻撃の手が僅かに緩まる。

「お顔は綺麗に残さなきゃねえ」

絶好の間隙をぬって、ユウマの剣が煌く。

女の右手の人差し指の爪が瞬時に刀剣ほどの尺まで伸び、金属音と共に重い一撃を受け止めた。細いわりに、磨き抜かれた鋼に匹敵する強度を誇る指爪。

ひるまず、ユウマは剣戟けんげきを繰り出す。女に反撃の余裕を与えるつもりはなかった。

ギンギンと乾いた音が氷原に響く。

大きく左から振りかぶって、女がそちらに反応を見せた瞬間、がら空きになった反対の脇腹を容赦なく蹴り上げた。

フェイクは成功し、女が吹っ飛ぶ。

派手に雪をまき散らしながら地面に転がった女に駆け寄り、すかさず剣を振り下ろしたが、女は跳ね起きるようにしてそれをかわし、距離を開けるとぶるつと震えた。

脇腹を押さえているとをみると、ダメージを受けていないわけではあるまいに、ハアハアと荒い吐息と共に、ねだるように喚く。

「いいわいいわもつと激しく攻め立てて〜」

一方ユウマはピクリとも表情を動かさず、剣を構え直すと、再び攻撃に入った。

女は爪を引っ込め、体術で応戦する戦法にしたらしい。ユウマの一撃を身を屈めて避けると、拳を振るう。

やはり恐ろしく速い。が、本気のアレスの剣の方が、わずかながらなお速い。焦らなければ、避けられる。

ステップを駆使してかわすと、斬りつけた。怒涛の剣戟。女の肩から、鮮血が舞う。

「ああんっ」

「もう一度言う。あいつを、戻せ」

地に臥せった女に刃の切っ先を突きつけながら、降りしきる雪よりも冷たい声音で、告げた。

女は、こんな状況にもかかわらず、口元に満足げな弧を浮かべる。

「ああ……やはりおまえは最高だよ、イシュリッド……大好きだ。食べてやりたいくらい!!」

刹那、大きく開かれた女の口から白いひも状の塊が飛び出し、傘のように開くと、ユウマの全身を包んだ。

反射的に剣を一閃して皮膚に触れられる前にまとめて切断したが、不意にくらりと眩暈を覚えて動きが止まる。

切り落とされた無数の触手はざっと地に落下したが、切断面から即座に再生した細紐がまた猛然と襲い掛かり、ユウマの両の手足と首にぐるぐると巻きついた。

途端に、全身をほとばしる電流。

「ぐああああああ」

たまらず、絶叫が漏れ、崩れ落ちた。

女はこの上なく幸福そうに頬を染める。

『ふふふふ……つ・か・ま・え・た』

喉の奥から数え切れないほどの細い細い触手を出したまま、脳天から発するような甲高い声で宣告する。

ユウマの全身が痺れ、視界が霞む。

今の彼は、地に磔刑にされたような形で横たわっていた。

触手の絡みつく力はいく弱く、ただ触れている程度にも拘らず、身動きが出来なかった。

振り払う力が、入らない。

今の電撃のせいなのか。

どこかからひどく甘い、熟した果物のような香りがして、意識さえ朦朧としてくる。

顔に打ち付ける吹雪さえ、柔らかなわた雲にくすぐられるような錯覚。

『ほおら、目を瞑ってごらん、もっともっと気持ちよくしてあ・げ・る』

嫌悪しか感じなかった、べとついたあの女の声が、なぜかひどく優しげに、こわくてき蠱惑的に耳をくすぐる。

次の瞬間。

めきつという不吉な音と共に、女の手によって、彼の右腕が奇妙な方向に曲げられていた。

「――！」

声が出ないほどのありえない痛みに、虚ろだったユウマの瞳が開かれ、顔面は蒼白に染まる。

「貴様……っ」

冷や汗を流しながら、切りつけるような視線を向けたが、体は麻痺したまま、動かなかった。

『クスクス……辛いだろう？ 痛覚だけは、十倍にしてやったからね』

歌うように言いながら、女は指を立てた。みるみる、鋭い爪が出現する。

『眼球をえぐり出してやろうか……』

研ぎ澄まされた切っ先が、ゆらりとサファイアのすぐ間近に迫り

『うつん、やっぱり顔はダメ』

ぷすり。

無造作に突き立てられた尖端は、筋を裂き、骨を砕いて、ユウマの肩を貫通した。

「~~~~~」

ぷすつ。ぷすつ。ぷすつ。

女は、一度空けた箇所を、微妙にずらしていきながら幾度も執拗に刺し貫く。徐々に、広げられていく傷口。

時折、ぐりぐりとえぐるようにかき回される。

悶絶するしかない、途方も無い激痛。

「ぐっ……っ……っ！」

ともすれば意識を失いそうになるのを、歯を食いしばって必死で堪えた。

くたばるわけには、いかない。

風上、はらはらと降りかかってくる氷雪を背に、多幸感に満ちた面持ちで屹立する女——その向こうに佇む、悲痛な面影を浮かべた氷像。

（……スマラチア……！）

戻してやらなければ。

なんとしても、戻して、もう一度。

今度は、ちゃんと、話さなければ。

『ほう……大したものだ。発狂してもおかしくないのに』

責め苦に耐えるユウマの様子を陶然としたように眺めていた女が、彼の視線を辿って、鼻を鳴らした。

『その精神力に免じて、いいものを見せてやろう。……うふふ、なんだと思う？』

彼の目前で見せびらかすように振ってみせた、二つの小瓶。一つに、黄色。もう一つに、赤の液体が湛えられていた。

『この黄色の液体が、氷の呪いを解く魔薬』

ハッとしたように息をのむユウマをニヤリと嘲笑うように見つめてから、女は続いてもう片方をかざす。

『そしてこの赤いのが、決して溶けない永久の氷像にする魔薬。これをかけてしまえば、もう、黄色をかけても意味はない。……本当は、おまえを氷漬けにしたら、すぐこれを使おうと思っていたのだけれど……』

女は、赤の小瓶の蓋ふたを外すと、ゆっくりと、スマラチアの頭上に傾ける。

赤い液体が、今にも零れそうに瓶の口まで広がり……

「やめろっ」

動けないはずのユウマはその瞬間、体に触手を巻きつけたまま、とっさに起き上がり女の片腕を掴んでいた。

肩の傷口から、ドクドクと血液が吹き出すが、この腕は離すまいと力を込める。

横から吹き付ける風に女の緋色の髪が煽られ、その狭間からぽかんと呆れたように丸められた目が覗いた。にわかに哄笑する。

『アッハハハハハハ！　へえ、まだ動けるのか。安心おし、イシユリード。妾はこんな粗悪品は欲しくない。失敗作は——』

女の唇が残忍に歪み、濡羽色の瞳が酷薄に彩られた。

——それは、あつという間の出来事だったけれど、ユウマには、まるで、スローモーションのように映った。

彼の腕を振りきるように、蹴り上げられた女の足。

ロングブーツのヒールが、氷像に、めりこむ。

シャラララン……

軽やかな、涼やかな儚い音が鼓膜を震わせ、サファイアの双玉がめいっばい見開かれる。

舞い散る、透明な破片。

バラバラに碎かれる、幾つもの氷塊。

腕も、足も、胴も、頭も——全てが煌く氷の粒となり、スマラチアは、崩壊した。

「――！！！！」
一切の思考が停止し、固まったユウマに降り注いだのは、女のけたたましい高笑い。

『素晴らしい！ 素晴らしいよ、絶望の華に彩られたおまえの瞳！ ああん、妾はその顔がみたかつたんだ！ たまらなくいい！！』

唇の端からよだれを垂らし、身悶えてから、女は腰を屈めて、何かを拾った。先ほどまで、氷像の足元に転がっていた、空の聖杯。女は、喉から伸びていた細紐を歯で噛み切り、触手をしまつと、聖杯にふたをするように手で覆った。

なにやらボソボソと呟くと、みるみる聖杯に液体が満ちる。

満足げに愉悦ゆえつの笑みを浮かべてから、女はユウマの頭を抱き起こした。

ユウマはもはや抵抗の気配をみせず、されるがまま。

その蒼い瞳は、何も映していないようだった。

「駄作を始末したところで、本番に映ろうか。さあ、これをお飲み。そうすれば、おまえは永遠に妾のもの……」

力なく、薄く開かれたままの唇に、グラスが押し当てられる。それでも、依然としてユウマは何の反応も示さない。

液体がグラスの壁を伝い、彼の口に流れ込む――その間際。

ユウマの体は雪の大地に打ち捨てられ、飛びのいた女がさっきまでひざまずいていた場所に、銀色の閃光が奔った。

女の移動先に、狙いすまされたように放たれた業火が襲い掛かり、その全身が暁に包まれる。爆風を伴った、凄まじい火炎呪文。

「オルティスと……アナスタシアか」

髪をかき上げながら、炎の中から悠然と歩み出てきた女に、アレスとセリナは衝撃を受けたようにそれぞれ顔色を変えた。しかし、すぐに表情を引き締め、いつでも攻撃に移れる姿勢に構える。

ちらりと、茫然自失に陥ったユウマを一瞥し、アレスは顔をしかめた。

「人の弟を、散々いたぶってくれたみたいだな？」

普段どおりの口調ながら、底知れない怒りを潜ませた、声。

「貴女だけは、絶対に……許せません」

頬を紅潮させ、らんらんと瞳に炎を揺らめかせて、セリナ。そのおののく唇から、続けざまに上級精霊が召還される。

「フェルリダー！」

空から稲光が轟き、激しい電撃が女を直撃した。弾ける光。震える大地。周囲の氷が瞬時に蒸発する。

もうもくと立ち込める白い霧が晴れた時、そこに立っていたのは、何事も無かったかのような余裕の笑みを浮かべる緋色の女。

勝ち誇ったように、言い放った。

「妾に精霊魔術は通用せぬ」

「……ならば！」

アレスが地面を蹴った。空けられていた距離をもともせず、懐に飛び込み、白光一閃。

ギーン！

女が伸ばした爪で受け止めるが、アレスは間を上げず剣を振るう。

ギーン！ ギーン！ ギーン！

息つく暇も無い疾風怒濤うげんとうの連撃。

（アレスお兄様……！）

倒れたユウマに駆け寄りながら、戦闘を見守っていたセリナの顔が、すうつと青ざめた。

横なぎに剣を振りかぶった瞬間、アレスがいきなり、力を失ったかのようにガクリと膝を曲げたのだ。

女が嘲笑を浮かべながら、その背を串刺しにせんとばかりに鋭利な尖頭を振りかざす――

「シルフィーネ！」

とつさにセリナは手を伸ばし、風精霊を呼び寄せた。

吹き付ける突風にも女はびくともしなかったが、重心を失ったアレスは煽りを受け、雪原にごろごろと転がった。結果として、十分

な間合いが確保される。

「……強引！」

苦笑しながら、雪をまき散らして金色の長身が跳ね起きる。

「大丈夫ですか？」

「ああ、解けた。だが……」

グツと剣柄を握り締め、険しい表情で沈黙。
思いあぐねるのは、次の一手。

「ふふふふ……まとめて、地獄送りにしてやろう……と言いたいところだが」

女は興ざめたように肩をすくめた。

「そろそろ、奴らが勘付く頃だろう。……イシュリード！」

ユウマは、ひざまずいたセリナに半身を起こされながら、女に呼びかけられても、相変わらずぴくりとも動かない放心状態だった。
そんな彼の様子に幸福そうに艶笑を浮かべてから、女は構わず言葉をつなぐ。

「妾は、閻の8神が一人、陶醉の女神アシュベリラ。この名を以っておまえが呼べば、妾はいつでも応じようぞ。ただし……他に邪魔者の入らない空間においてのみ、だ」

最後の響きが伝うや否や、女は姿を消した。

入れ替わりのように現れたのは、七つの影。

瞬間、緋色の女がまき散らしていた禍々しい気配は立ち消え、その場の空気が一斉に清浄化される。

「スマラチア！！」

七人のうち一人が悲痛な声で発したその名前に反応するように、ようやく、ユウマがかすかに身じろぎした。

くぐもった蒼の瞳が、のろのろと移動する。

無残に碎かれ、二つの足首だけがひっそりと残る氷像を視認し……誰かの泣き声や憤まんに満ちた叫びをどこか遠くの世界のもののように聞きながら、彼の意識は、深く重い闇へ溶けていった。

15・十六歳 — 闇との対峙？（後書き）

ここが物語の第2ターニングポイントになります。
拍手をたくさんありがとうございます。本当に嬉しいです。
感想、メッセージ等もお気軽に寄せください。

16 十六歳 ― 神界にて？

星が、降っていた。

無数の星が、天からひらひらと舞い落ちる。

違う。これは、雪。

彼は、まだ幼いままで、ベッドの上にいた。

何度も繰り返し夢でみた、胸の中で思い返した、あの奇跡の光景。

透かされた、空と天井。

満天の星空から降りしきる、無垢な雪。

病に臥せった夜。

やるせない出来事に深く傷ついた時。

その夢幻の追憶は、何度となく彼の心を癒し、慰めた。

どんなにのしかかるような分厚い雲が覆った日々も。荒れ狂う嵐の時でさえ。

見えなくても、そこに確かに存在する、たくさんの永遠なる光。

「……ありがとう」

囁き声に振り返ると、胸を震わせるような、綺麗な笑顔。

ああ、と今頃気付く。

きつとこの時から、ほんとうはずっと……。

手を伸ばした瞬間。

——シャラララン

不意に、その彼女の姿が、粉々に、砕け散る。

周囲に踊っていた優しい雪は、猛吹雪となり、彼を喰らいつくさんとはかりに襲い掛かる。

頬に体に打ち付ける、横殴りの氷のつぶて。びゅうびゅうと唸りを上げる咆哮。

吹き飛ばされまいと必死に身体を踏ん張りながら見上げた空は——塗りつぶされたような、暗黒。

——自らの絶叫で、ユウマは覚醒した。

「お兄様!!」

アメジストの双眸を不安げに揺らして、セリナが上からのぞきこんでいた。

「……………」

全身を襲う震えを制しながら、ユウマはゆっくりとベッドから身を起こす。

見慣れない部屋だった。空間遣いのぜいたくさや調度品の見事さ

は王宮さながらだが、それにしても、天井が、高い。

吸気が、山嶺さんれいにいるかのごとく清々しく、全身に沁みこむような癒し効果を感じる。

確かに初めての場所なのに、妙な既視感があった。まるで、昔夢で見た場所を訪れたような、あやふやな懐かしさ。と同時に、この空気は、馴染んだものであることにも気付く。

辺りに満ちる不思議な清らかさは、スマラチアの気配に、とてもよく似ていた。

「ここは『神界』……スマラチアや神々の住処だと。まさかこんなところに来る日がくるとはな」

彼の心中に答えるように、聞きなれた声が耳に入る。アレスが、腕組みをして立っていた。

いつになく愁いに満ちたその表情が、先ほどの出来事が夢ではないことをユウマに思い知らせた。

「傷のほうは、治癒リバイラの精霊で治したつもりですが……もう大丈夫でしようか？」

頷きながら、まだどこか心あらずといった様子で礼を返すユウマに、セリナはやるせなさ気に睫毛を瞬かせた。

「ごめんなさい」

震える唇から零れたのは、謝罪の言葉。

「遅くなってしまうて。……洗濯係から、ユウマお兄様の外套がいとうにこんなメモが入っていた、と渡されて……それが、スマラチアさんからの、儀式の危険を告げる内容で。すぐに駆けつけたかったのです

が、私は行ったことのない場所だったので、アレスお兄様を探して
いたんです」

「俺も……街から戻ってきたエルザから、同じ内容の話を聞いて。
スマラチアから伝言を頼まれてたのに、子どもの事故で頭が真っ白
になって、伝えるの遅れてすみませんって血相変えてた。けど、俺
の風精霊シルフィーネのレベルじゃこの吹雪ではとべねーから、やっぱりセリナ
を探してて……悪い」

もう少し早く着いていれば、なんとかできたかもしれないのに。
いや、果たして三人揃っていても、あの女を止めることができた
のかは甚だ疑問はなはに思いつながら、それでも、アレスもセリナも、悔や
まないわけにはいかなかった。

あんな化け物に、彼一人で対峙させてしまったという事実を。そ
の結果としての、代償の大きさを。

「……おまえ達が、謝ることじゃ、ない」

初めて聞く、呻くうめようなユウマの声に、兄と妹はハッと息をのむ。
掛け布のシーツをグッと握り締めた両手。うつむいて、表情のう
かがい知れない彼が吐き出したのは、身を切られるような、痛々し
い、かすれた音。

「俺が……俺の、責任なんだ」

彼女は何度も、伝えようとしてくれていたのに。

直接告げることなど不可能な状態に追い込んだのは、彼自身。
あの時、ちゃんと話を聞いていれば。

何より、自分にもっと力があれば……。

「——っ——」

ポタリ。

……ポタリ。ポタリ。

白いシートに雨粒のような染みが点々と滲む。^{にじ}

プライドの高い彼が、声もなく肩を震わす姿に、セリナの瞳からもボロボロと雫が溢れた。たまらず、すすり泣きが漏れる。

アレスが、何か言いかけて、声を詰まらせたように唇を噛む。一度顔を背けてから、また視線を上げ、悔しさを焼き付けようとするかのように、目の前の光景を拳を握って見つめた。

「こうなったのは、スマラチアの意志です」

不意に、凜とした声が、空間に響いた。

ドアのない入り口に目を向けた三人が見たのは、流線的なラインのクリーム色のドレスを身にまとい、深い夜の闇を思わせる濃藍色の髪をゆるゆると背中にした、艶治^{えんや}な女性。

どこことなく気だるげな、艶かしさを漂わせる白皙のその面影には、ユウマも見覚えがあった……月の神殿に建てられた聖像と、同じ風貌^{めい}。

セリナが、説明するようにそつと囁く。

「月の女神、ミネリシス様。私たちを、神界に連れてきてくれた方ですわ」

ミネリシスは、長い睫毛を一回瞬いて、ため息混じりに、言葉を紡いだ。

「ベルギスに聞きました。あの子は、自分で聖杯をあおったのでしよう？ 呪いがかかっていることを判っていて……消滅を、覚悟し

ていたということです」

「自分で……なぜ、そんなことを？」

アレスが問いを発すると、女神はなぜか一度軽く首を垂れてから、説明を始めた。

「おそらく、予言を見たのでしょう。スマラチアは、神々の中でも特殊な、運命を先読みする『星読み』の女神なのです。そして、彼女が見た未来は、どう行動しても避けられないさだめごと……。ユウマ様が聖杯をあり、氷像と化す未来を見てしまったスマラチアは、その運命をねじ曲げる唯一の手段として、『運命』そのもの、すなわち運命の女神たる自らの存在を破壊したのだと推測できます……」

くつきりとアーモンド形を描いた、一見白っぽいが、照明の反射によつては神秘的な青にも染まるブルー・ムーンストーンのような瞳が、ゆっくりと三人に視線を巡らす。

「スマラチアは、己の責務を果たしたのです。私たち……光の8神の勤めは、世界の秩序の維持と同時に、来るべき決戦に向けて、偉大なる3柱神を守り、支えること。もっともスマラチアは、そんな責任などは露知らず、完全な私情で——自分の心の大きな支えとなつていた人を助けたいという、ひたすら純粋な想いで行動にでただけだ。

その命を賭してまで守りたかった人が、まさか、3柱神の一人、正義神イシュリードだとは夢にも思わず」

17・十六歳 ― 神界にて？

「イシュリード……あの女も、ユウマお兄様をそう呼んでいましたわね。正義神？」

眉をひそめながら先を促すセリナに、ミネリシスは頷きながら、三人を見回す。

「ユウマ様は、正義神イシュリードの生まれ変わり。いいえ、ユウマ様だけではありません。セリナ様は、希望神アナスタシア。そして、アレス様は光神オルティスが、人へと転生なさったお姿です」
「アナスタシア……」
「オルティス……」

呆然とおうむ返しにしながらも、セリナもアレスも、その名称に、さわさわと深部を撫でられるような不可解な感覚を覚えていた。

「すぐには信じられないのも無理はありません。けれど、お三方の風貌は正しく前世の生き写しそのもの。それぞれが生まれながらに有する能力も、です。私たち、光の8神は、ずっとお待ちしております。あなた方が成長なさって、3柱神としての使命に目覚められる時を――。けれど、それが私たちの予測よりも早く、敵に先手を打たれる形になってしまったことには、お詫び申し上げるほかございません」

「使命……敵……俺が、あの女と戦うことは、さだめられた事だったと？」

苦々しそくに吐き出されたユウマの問いに、ミネリシスは明確に首肯する。

「ええ。しかし、私たちの《敵》はあれ一人ではありません。アシユベリラは、魔界に封印されし巨悪の、部下の一人に過ぎないのです。そして、その巨悪の完全消滅こそが、3柱神をはじめとする我ら光の神々の悲願……！」

前世では、残念ながら奴を魔界へ封印するという不完全な形でしか成し遂げられませんでした。それでも、一定以上の力を有する極悪な魔族を通過させないようにする結果は張られたのです。……時の経過と共に、その結界も徐々にほころびをみせ始め、即応して修正していたつもりでしたのですが、いつのまにかあんな強力なものまで入り込んでいたことは、私たちの大きな過失です」

ミネリシスが口を閉ざすと、部屋には沈黙が落ちた。すぐには受け入れがたい、彼らの肩に担われたあまりに大きな宿命。

「……どうしろっていうんだ」

うなるように、静寂を破ったのは、ユウマ。

「たかが部下というあの女一人さえ……止められず。俺達に、いたい何ができると!？」

砕け散る氷像が^{まぶた}瞼にフラッシュバックする。

全身に激痛が走るような錯覚を覚え、奥歯を噛み締めるユウマに、月の女神が何か答えかけたその時。

新たな声、それも、場違いなほどに明るく高い声が、空間に飛び込んできた。

「スマラチアが、元に戻るかもって!!」

全員が一斉に振り向いた先に立っていたのは、ローティーンの美少女。大量のフリルとレースで華やかに装飾されたワンピースに身を包み、興奮したように頬を紅潮させていた。

可愛い、とセリナがぼろりと零した一言に、耳聡く反応して、短いウインクを返す。

ピンクの花や小さなショートケーキのレプリカのついたヘッドドレスを当てたツインテールの髪は、光の反射によって様々な色を見せる不思議なプラチナ。

同じ色の、ぱっちりとした大きな瞳。少しだけ上を向いた小作りの鼻に、愛嬌のあるアヒル口。幼さの残る、ふつくらした頬。

8神の中でも一際外見の印象的な、虹の女神リンボーラ。

ふんわり膨らんだ膝丈のスカート（よく見ると、淡いパステルカラーでケーキやフルーツのイラストが描かれている）を翻し、こっちこっち、と全員を促した。

靴下もフリフリで、靴は上げ底仕様のレースアップ。背中には、なぜか天使の羽根の付いたリュックを背負っている。

「神様が、羽根付きリュックって、シニールじゃねえ？」

パタパタと駆ける虹の女神を追いながら、ぼそりとアレスが漏らした。

連れて行かれたのは、ロビーのような広々とした空間だった。正面に、両開きの立派な扉がある。

「今、この奥の部屋で施術中だから待っててね。あっと、戻るって言っても、氷像の状態に、っていう話なんだけど……それでもあんなバラバラだったのに復活できるってんだから、やっぱサマンサは

すごいよね」

くりくりと瞳を回して、感心したように腕を組む虹の女神に、セリナが小首を傾げる。

「サマンサ？」

「うん、天空の王女サマンサ。太古より存在する『創造の一族』の生き残りにして、ここ天空城の主。ちょーっと無愛想だけど、優しい子だよ」

リンボーラが無邪気な笑顔で答えたその背後で、扉が、ゆっくりと開いた。

眩い光が差し込む中、ほっそりとした一つのシルエットが浮かび上がる。

朝焼けの雲のような、淡いピンクの、腰まで伸びた柔らかそうな髪。シンプルなフォルムの白のドレスに包まれた華奢な姿態。深海をほうふつとさせる青緑の瞳。

抜けるような白い肌に、微かにあどけなさの残る端正な顔立ちながら、どこか人形めいた、無表情が印象的な少女だった。

「サマンサ、どうだった!？」

意気込んで尋ねるリンボーラの方にチラリと視線をやり、小さく頷く。

「成功しました。ただ……」

言いかけて、ふと、眉をしかめた。は、と苦しげな吐息を漏らしたその身体が、不意に傾ぐ。

間髪いれず、動きだした俊敏な影があった。

差し伸べられた手が、すんでのところで彼女の地面への衝突を防ぐ。

「……………！」

セーフ、と安堵の息を吐きながら覗きこむ金の瞳を間近に捉え、
「見感情に乏しそうな少女の頬がほのかな桜色に染まった。

孔雀石くじゃくいしのようなその瞳の面積をわずかに広げながら、呆然としたように、呟く。

「オルテイス、様…………？」

「あゝっと…………」

アレスが戸惑ったように視線を彷徨さまよわせるや否や、サマンサは即座に動揺の色を消し、自らを支えていた力強い腕からそっと身を離した。

「失礼いたしました。復活の儀式に体力を消耗し、眩暈めまいを起こしたようです。危険なところを助けていただきまして、ありがとうございます」

淡々と謝礼を述べ、頭を垂れる。

「いや、怪我がなくて何より。……………まだ顔色悪いみたいだけど、大丈夫か？」

「はい」

前髪をかき上げ小さく笑ってから、気遣うような眼差しを向けるアレスに、吸い込まれるように固定されていた孔雀石が、またすぐ

に逸らされた。

「スマラチアは？」

ユウマが鋭く、問う。

17・十六歳——神界にて？（後書き）

この回の更新に先駆けて、第五部に「十歳——コンプレックス」を差し込み改訂しました。

といっても順番入れ替えてちょっと加筆したくらいなので、ずっと読んでくださってる方はそのまま読み進めていただいて問題ありません。

実はちょこちょこ細かい改訂はいっぱいしてます（苦笑）自分の文章にはつくづく粘着質な私……

18 十六歳 ― 神界にて？

「お入りください」

促されて入った部屋の中央に、破壊される以前の姿のままの、星の女神の氷像がたたずんでいた。

「水の女神の協力で全ての欠片を回収できたこと、すぐに施術に取り掛かれたことが幸いし、この状態までなら蘇らせることができました。しかし」

玲瓏^{れいろう}とした声音に、愁いがにじんだ。

「そう長くは、持ちません。一刻も早く呪いを解かなければ、崩壊し、再びそうなければいかなる手段を用いても、二度と蘇生は不可能です」

「具体的には？」

「明日の、夜明けまで……およそ、あと十時間」

「……！」

「無理だよそんなの！」

悲鳴のような叫びを上げたのは、リンボーラ。さっきまでの浮かれた様子が嘘のように、取り乱して、サマンサに詰め寄る。

「だって、今の段階ではまだ戦える手段が……そもそも、アシユベリラの居場所さえわかってないのに！」

「落ち着きなさい、リンボーラ。サマンサを責めることではないわ」

虹の女神をなだめるミネリシスもまた、青ざめ、唇が震えていた。

目の前の景色が、にび色に染まり、空気が鉛のように重く、よどむような錯覚。

絶望の中、ひとたび湧き上がった希望が再び打ち砕かれた痛みは、一層のやるせなさを伴って彼らの全身をさいなんだ。

ユウマは、ぐらりと歪みかけた視界を、頭を振ることで持ちこたえ、深く呼吸をする。身体を踏ん張って、しばし黙想してから、静かに顔を上げた。

グツと拳に力を込め、踵を返すその背に、お兄様、とよく通る声が投げられる。駆け寄り、腕を取って見上げてくるのは聡明な紫の瞳。

「お一人で、なんて無茶ですわ。私も、一緒にします」

「あの女は、『他に邪魔者の入らない空間においてのみ』……一対一を指定した。俺以外のものがいれば、姿を見せないだろう」
「……………」

ユウマの気持ち、スマラチアの状況、自分のできること、やるべきこと、最悪の可能性……様々な視点が交錯し苦しげに顔を歪め沈黙するセリナに、険しかったユウマの眉が一瞬だけ和らいだ。

妹の頭を、いさめるように一回撫でてから、絡んだ手を解き、毅然とした動作で歩き出す。

しかし、その足がまた、止められた。

蒼の瞳が、苛立ったように剣呑な光を浮かべる。

「……おまえも、止めるのか？」

「止めねーよ。俺がおまえなら、斬ってでも行く」

わかっているならなぜ、と怪訝そうにかすかに首を傾ぐユウマに、アレスは「でもなあ」とため息混じりに言った。

「夕飯くらい食ってからにしろ。おまえ、朝もろくに摂ってなーし、昼も抜きでぶっ倒れてただろ。腹が減っては――てやつだ」

虚を突かれたようなユウマに、サマンサが至ってクールに「お食事なら、こちらへ」と先導するように促した。

食卓の上に並べられたのは、パンや干し肉、果物や焼き菓子、飲料水といった、すぐに口に出来る品々ばかりだった。味や食感はどうも非常に良い。

神界の食事は誰が用意しているのだろう。そもそもこれが神々の普段の食事なのか、それとも彼のために臨時で用意させたものなのか……いつか問うてみたいと思いつつ、とりあえず今は時間が惜しい。

黙々と、食事、というよりはエネルギーの摂取に専念するユウマを見遣りながら、サマンサが、ぽつりと漏らした。

「スマラチアは」

手を止め、視線を上げたユウマに、「食べながらで結構です」と断り、言葉を紡ぐ。

「真面目で礼儀正しくて頑張り屋で、ちょっと人見知りだけど優しい子でしょう?」

ブーツと思いつきり口の中のを嘔き出しそうになる衝動を、ユウマは必死で抑えた。

むせかけて微妙に涙ぐむ彼に、クスリと小さな笑みを浮かべなが

ら、サマンサは水を差し出す。

「神界のスマラチアは、そういう子なんです。彼女は、他の神々に比べ、だいぶ経ってから誕生した一番新しい女神で……皆から可愛がられていましたが、彼女自身は、周りに心を開けず寂しい思いをしているように見えました。まだ幼いということで、他の神々が知っている情報が、彼女にだけは伏せられている、ということも多く、それがますますスマラチアに壁を作らせていたのだと思います。運命を予知するという特殊な能力に、戸惑い、精神的に不安定になることも多かったのですが……貴方と交流を持つようになって、彼女は変わりました」

人形のように端然とした面立ちながら、ユウマに向けられる孔雀石の双眸は、柔らかな彩をたたえていた。そこに浮かぶのは、感謝の念。

「張り詰めていたような雰囲気が和らぎ、笑顔が増え、仕事にも余裕が出てきたようでした。自分の中に感情を抑えがちなあの子が、初めて、素のままに振る舞える相手が、イシユード様だったのだと思います。……彼女自身、逆に大きすぎる感情に振り回される様子も見受けられますが」

「……………」

「結局、肝心なことは、舌足らずだったり……？」

まるで何もかも見透かされているような居心地悪さに、ユウマは目線を逸らし、目の前の料理を啗内に放りこむ作業を再開した。

『ありがとう』

遠い記憶にある彼女の笑顔と、今聞いた話が溶け合って、じわじ

わと沁みていつて、すつきりしたようでそのくせ喉が詰まるような苦しさかわき起こって、妙に熱いし細胞はざわざわ騒いでるようで落ち着かないし、空腹の割にもうちつとも食欲を感じなかったけれど、とにかく水と一緒に色々全部自分の中に流し込んだ。

それにしても、天空の王女サマンサ……彼女は一体、何者なのだろう。

「私は、光の8神とは違います」

まるで、ユウマの心を読んだかのようなタイミングで、サマンサが言う。

「3柱神を守り、支えるのが8神。スマラチアが命を賭して貴方を守ろうとしたのも、責務を全うした結果……他の8神は、悲しみながらも、その運命を受け入れています。そして、たかが8神の一人に過ぎないスマラチアを守るために、正義神たる貴方が自らを危険に晒すことは、決して許さないとはいはず」

とうとうと話しながら、カタリ、と机の上に何かを置いた。錠剤の入った、薬瓶。

「睡眠薬です」

思わず食事の手を止めるユウマに、ご安心を、と淡く笑みを浮かべるサマンサ。

「言ったはず。私は、光の8神とは違います。——スマラチアの気持ちを考えて、勝利の可能性もないまま、むざむざと貴方を戦地へと赴かせるのは、止めるべきなのでしょう。けれど……」

無表情の仮面が、おもむろにひび割れた。青緑の瞳から、透明な想いが溢れ、白い頬に流れる軌跡を描く。

「ミネリスたちには、貴方は眠って寝室へ運ばせたと説明します。どうか……どうか、あの子を、助けてください……」

19・十六歳——決戦？

サマンサに頼んで降り立った地は、彼が毎朝トレーニングでも走る湖の畔だった。

白く染まった夜の森は、静寂そのものだった。自分の呼吸しか聞こえない。

闇に覆われた視界。

肌を切り裂くような極寒。

まるで全ての生命が死滅した世界に自分ただ一人残されたような、そんな錯覚を覚えたが、適当な木に複数のランタンをぶら下げると、森の奥へと続くノウサギやキタキツネ、クロテンなどの足跡が雪の上に浮かび上がる。木肌には、キツツキの食痕。

生命の印に、勇気付けられた。

珍しく、雪は止んでいた。風もない。

見上げた空は、分厚い灰色の雲で覆われていたけれど――。

「アシュベリラ」

静かだが響く低音が、凜としじまを破った。白い吐息が、宙を舞う。

「解呪の小瓶を、渡してもらおう」

再び、しんと静まり返る森。どこか遠くから届いた狼の咆哮が鼓膜を震わせ、その余韻さえも消えた頃……。

禍々しい気配が、うつそうとした針葉樹林の奥からゆっくりと近付いてきた。

茂みの狭間から姿を見せたのは、緋色の髪と濡れ羽色の瞳をもつ、魔性。

闇の8神が一人、陶醉の女神アシュベリラ。

「まさかこんなに早く再会できるなんて感激だよ……治療精霊で怪我は回復したようだが、削られた体力までは戻るまい？ そんな体で、妾に立ち向かおうというのか？」

彼女と戯言を交わす気はなかった。鋭く問う。

「小瓶は？」

「はて……力づくで奪ってみるがいい」

こちらの出方を伺うように、ニタニタと笑むアシュベリラ。

魔法は通じない。

ダメージを与えるには直接攻撃しかなかったが、彼女のテリトリに踏み込むと、今度はあの体の自由を奪う幻術が待ち受ける。

幻術を破るには――

「万物に宿りし精霊達。穢れを払う浄化の風よ。我に力を……シルフィーネ！」

精霊魔法の発動とともに、かざされた両手に、巻き起こる旋風。すつと濡れ羽色の目が細まった。

先の戦闘では、アシユベリラの喉から飛び出た触手に捕まった直後、全身の自由を失った。

最初は触手に触れたら幻術にかかるのかと思ったが、その後駆けつけたアレスが、触手とは無関係に膝を折っていた場面を、茫然自失となりながらもユウマは目撃していた。

そして、セリナの風精霊で飛ばされた直後、呪縛の解けたアレス。自分が拘束されていた時を思い出しても、アシユベリラは風上におり、束縛が解けた一瞬、見上げた視界に映ったのは大きく横に煽られた緋色の髪——横からの激しい風が吹き付けていたということだ。

以上のことから類推するに、幻惑は目には見えない霧のような形で彼女から放出され、それを浴びている間だけ囚われる属性をもつのではないか。

——すなわち、風を制すれば幻術も防ぐことが可能。

「一回の戦闘で、見極めたのか」

豊然と、口元に弧を描く陶醉の女神。

「だから妾はおまえが好きなんだ。……ゾクゾクする。だが、そう、うまくいくかな？」

魔法を操りつつ、剣を振るうことはできない。

接近して風のやまないうちに、一刀の元に斬り捨てる。

そう、勝負は、わずかなタイミングで決する。

息を殺して見詰め合う両者。

深閑とした夜の森。

ユウマの手の中の風球だけがうなりをあげる空間に、不意に、パチーンと澄んだ音が割り込んだ。

木の中の水分が凍結して膨張し、その膨張圧で幹が割れる現象――凍裂。とうれつ

それが合図となった。

飛び出したアシュベリラの猛威の拳がユウマの腹部に襲い掛かる。驚異的なスピードだった。

身をひねったが完全には避けきれず、脇腹をえぐられた。舞い散る鮮血。

激痛は集中力で押さえ込んだ。手の中の風の塊をアシュベリラの顔面に叩き込み、剣柄を引き抜く。

高速の抜刀に、火花が走る。

（もらった……！）

横なぎの重い一撃が敵の半身を真つ二つにせんと振りかぶられたその瞬間、視界に映りこんだキラリと光る何か。

ガラスの小瓶。ちやぶんと弾む黄色の液体。

剣閃の先に掲げられたそれにギクリと強張り、その刹那の逡巡が、仇となった。

またたくまに彼の嗅覚を犯し始める、熟しきった果物のような甘い甘い芳香。

霞む光景。

侵蝕される意識。

——全身の力が、抜け落ちた。

「気に入らないな」

苛立たしげに顔をしかめるアレスに、ミネリシスは平然としたまま頭を下げた。

「3柱神は、誰一人欠けてはならない無二の存在。こうする他になかったのです」

「だからって、本人の意志を捻じ曲げて、薬を飲ませて無理矢理寝かしつけるなんて、卑怯だろ。寝室はどこだ？ 俺が叩き起こす」

「アレス様……ご理解下さい。先ほどまで瀕死の重傷をおつておられたユウマ様です。今の状態の戦闘など、ただ死に赴くようなもの……アシュベリラの居場所は、他の8神が懸命に探しております。見つかれば、私達が」

「刻限は明け方だろう？ 間に合うとでも？」

「……………」

落とされた沈黙を、焦燥に満ちた叫びが打ち破った。

「ミネリシス！！ まずいつ」

突然空間に現れた、こげ茶色の髪と瞳を持つ青年。大地神サリダド。

「魔界への結界が、各地でいっせいに歪み始めてる……！」

冷静なミネリシスの顔にも、サツと緊張が走った。

「8神は速やかに補修に移って。北部に、火、空。東部に大地、虹。南部に水、風。東部は私が」

指示を飛ばすや、アレスとセリナに目だけで会釈をし、月の女神は姿を消した。大地神も短い承諾を口にするやすぐに去る。

ホールのような空間に残ったのは、アレス、セリナ、サマンサのみ。

「——で、本当はどこにいるんだ、ユウマは？」

先ほどまでにじませていた怒りを嘘のように消し去って、さらりと向けられた言葉に、サマンサの双眸がハツとしたように見開かれた。

セリナが小さな苦笑を漏らす。

「アレスお兄様の演技力には脱帽しますわ」

「ああでも振る舞わないと不自然に思われるからな」

「……気づいて、らっしゃったのですか？」

「気づく、とは違うな。あいつがよりによってこの局面で、んな大人しく眠らされるわけねーだろ？ 仮に薬盛られたとしても、自傷してでも眠気飛ばして這ってでも出て行く奴だ」

確信とともに明瞭に語る彼の顔をじつと見つめていたサマンサは、やがて、かすかな吐息を落とすと、頷いた。

「メゼンティアの、エンネ湖です」

「エンネ……？ そんな場所で戦闘していて、なぜ、光の8神は気

「つかないのですか？」

セリナの問いに、サマンサは愁眉を寄せた。

「アシユベリラが、外部と空間を断絶させる障壁を張ったようです。彼女の命を奪うか、それに準じるような深手を負わせない限り、侵入も不可能と思われます」

「……また、一人で戦わせるしかないのか」

バシッと拳をもう片方の掌に打ち付けて、呻くように言うアレス。

「遅い……ですよね」

不安げに揺れる二つのアメジストを伏せ、セリナは祈るように両手を合わせた。

「ユウマお兄様……！」

19・十六歳——決戦？（後書き）

いよいよクライマックスです。

いつもご閲覧、拍手、ありがとうございます♡

作者の栄養源になっています。

メッセや感想もお気軽に♡

20・十六歳 ―― 決戦？

胸板に押し付けられる真っ赤な鋼鉄。灼熱。服が燃え、肌が焼け、表面の肉がじゅわじゅわと溶ける。

思わず絶叫をあげるユウマに、アシュベリラの瞳は喜悦でギラギラと輝いた。

「自分の体が焼ける臭いはどうだい？　痛みでそれどころじゃないかしら」

血に染まった雪の上、蒼白の満身創痍でぐったりと横たわる彼を眺めやり、いたぶる部分もなくなつたと見るや、アシュベリラは何度目かになる治癒魔法を朗詠した。

粉々に砕かれた骨が、無数の剣山で刺し貫かれた肉が、切断された筋が、剥がされた爪が、焼けただれた表皮が……ゆつくりと、回復し、彼に絶望を奏でる。

それは無間地獄。

陶酔の女神は、彼を殺さないよう細心の注意を払い、ぎりぎり回復が可能なところまでなぶりあげると、再生し、また弄ぶのだ。

体の痛みはひいていくが、絶えることなく繰り返される凄まじい拷問に、さしものユウマも虚脱状態で、もはや反抗の気力も湧かなかった。

腫れ上がっていたまぶたが軽くなり、ぼんやりと目を開くと、にび色に渦巻く空が見えた。

決戦の地にこの湖を選んだのは、ここが、メゼンティアで一番綺麗な星空が見える場所だったから。

彼女が見ていてくれるかもしれない——そんな、^{すが}縋るような一抹の感傷で選択したけれど、今は、どうか見ていてくれるな、と思う。

……なぜ、そんなことを思うのだろう。

ボロボロに痛めつけられて、諦めた、情けない姿を見せたくないから？

それもあるけど——。

ポタリ。

彼の頬に、何かの雫が落ちた。

涙？

『ごめん……ごめんなさい。私は、なにもできなくて。ただ、見てただけなの。ごめん、ごめんね、ユウマ。ごめん……』

蘇ったのは、忘れていた記憶。あの、奇跡のような星と雪の交じり合う光景を見た日のことだった。

幼馴染の死。無力感に身を震わせるスマラチア。

自分も、絶望に吞まれかけたけれど、彼女の瞳から零れた流星に頬を弾かれ、我に返った。仰ぎ見た彼女はあまりにも、弱々しくて、あまりにも、打ちひしがれて、辛そうだったから、全身全霊で、気力をふるいおこして、言った。

『俺は、負けない、から。だから——』

そうか、約束したんだ。

だから、あの時も、アレスに負けて拗^すねてた俺に、あんなに怒ったんだ。

『そりやどうにもならないことはあるわよ。でも……結果がわかってるからなにもかも無駄なんて、あんたが言わないで！』

ああ、そうだな。ごめん。約束は守るよ。

だから、泣かないで。おまえに泣かれると、困るんだ。

俺は、負けない、から。だから――

もう、泣くな。

蒼の瞳に、光が戻った。

ポタリ。

再び彼の頬を滑った水滴は、彼らの真上に大きく枝を広げる木から落ちたものだった。葉の上にたまった雪が、アシュベリラの用いた炎の熱で溶かされたらしい。

見上げた枝葉にふと違和感を覚え、ユウマは目を凝らす。二種類の葉が、混在している。

素早く木の幹に視線を流すと、針葉樹に、また別のツタ植物が絡まっていた。三枚の葉がワンセットになった三出複葉さんしゅふくよう。淵はギザギザの鋸歯きょし。

（これは――！）

「今度はどんな責め苦を与えてやろうかねえ」

「――アルジェ「トリエント」メゼンティア」

ユウマの唇から漏らされたその名に、嗜虐的な笑みを浮かべてい

た陶酔の女神の顔が、ぽかんと虚を突かれたものに变化した。

「三百年前にメゼンティアの表の歴史からは抹消された、血塗られた姫。美への執着から数多の処女をさらい、その血を浴びるというおぞましい儀式を繰り返した邪悪極まりない女。処刑されたということだったが……まさか闇に逃げ延びていたとはな」

淡々と告げられる口述に、陶酔の女神はうつとりと、とろけるような微笑を浮かべた。

「まさかおまえが知っていたとは……嬉しいよ」

「祠に近づけるのは光の神々かメゼンティアの血統のみ、という時点で、推測はしていた」

『よく調べてきたじゃない。えらいえらい』

子ども扱いして頭をぐりぐり撫でようとするスマラチアの手を振り払ながら、ユウマは疑問を口にした。

『なんでこの女はそこまでして美醜に固執した？ 女というのは一般的に外見を気にする傾向はあるにしても、極端すぎるだろう』

『そうよね。……実はこの姫、思春期に顔がぐちゃぐちゃになる事故があつたのよ。私も他の8神から聞いた話なんだけど。当時、メゼンティアに上級治癒精霊を操れる魔導師はいなくて、医師にもどうにもできなくて……憔悴しやうすいとショックでおかしくなっちゃったのね。それが、こんな恐ろしいまじないを試すようになった、裏話』

『事故……って？』

『スオミウルシに接触したことで生じる酷いかぶれ。植物アレルギー
ーね』

「スオミウルシの仲間には、針葉樹に巻きついて生育するツル丈のものがある」

それまで優位を崩さなかったアシュベリラの表情が、ピシリと強張った。

「ひどい毒性を持ち、時にはその葉から滴る露でさえ、かぶれを誘発する——俺達の、真上の、この木がそれだ」

ポタリ。

彼らの真横にまた雫が落下するや、アシュベリラは血相を変え、その場から大きく距離を空けようと飛び退った。

同時に、長い長い、永遠のようにも感じられた全身の支配が、ようやく解かれる。

「……やっと、動ける……！」

落ちていた大剣に手を伸ばし、残る気力を総動員して起き上がったが、眩暈に襲われ、膝をついた。

「憎憎しい……どこでそんな知識を？ 地上の資料には残しておらずぬはず」

ブルブルと怒りに全身を震わせながら、しかし、体に染み付いた大きすぎる恐怖ゆえ、その木の周囲には近づけないアシュベリラ。

「だが……術が解けたところで、おまえにもはや打つ手はあるまい。」

ほら、これが欲しいのだろう？ そんなところにいても、手には入らぬぞ？」

嘲るように顎を上げ、脇の切り株の上に、黄色の液体が揺れる小瓶をそつと載せた。

ユウマはぐつと剣柄を握りしめ、体力を確認する。ほぼ、限界だ。長くは、もたない。

最初のように、風魔法シルフィーネを放つても、斬りつけるまでに生じる間隙……そのほんの僅かの空白を、あの女は見逃さないだろう。

（風を——まとえたら）

強く強く願った瞬間。

ドクン。

鼓動が、躍動した。

ふと浮かんだ思い付き。そんなことが、可能なのか？
聞いたことが無い。

そんな剣技。
そんな魔法。

だが、ひるみそうになる意志を鼓舞するように、体は熱を高めていた。

やるんだ。きつと、できる。——自分にしか、できない。

ゆつくりと立ち上がると、目を閉じ、深呼吸した。

「万物に宿りし精霊達——汝、天翔あまかけるもの。汝、水上を滑るもの。

汝、大地を馳^はせるもの。汝、万象を巡るもの。しばしその自由を我が刃に……シルフレヴィラ!!」

詠唱と同時に、翳^{かざ}される大剣。巻き起こる烈風。青白い光を放ちながら、うなりをあげる竜巻が、ユウマの剣に宿る。

「精霊を、剣に融合!? まさかそんなことが……」

息をのむアシュベリラに、全身を剣と同じ蒼のヴェールに包まれた長躯が、無言で斬りかかった。

「チィッ」

身をかわしたアシュベリラだが、剣から放たれる風が鋭い刃となつてその身を切り裂き、赤い飛沫が舞い上がる。とっさに発動させた幻術も、吹きすさぶ風に無効化された。

さつきまであんなボロ雑巾のようだったのに、どこにこんな力が残っていたのか。

目まぐるしい、怒涛の剣戟に、アシュベリラは驚愕と焦燥の入り混じった形相で、応戦する。

激しい風圧に押されるように、ロングブーツの足元が乱れた。

精霊魔法は効かないはずなのだが、彼の剣を介して発生されることで通常の上級風魔法とはまた別のものに変質しているようだった。見開かれる闇色の瞳。

真っ赤に紅の塗られた唇を、絶叫がつんざく。

ザクリ、と左肩から尾骨まで鮮やかに切断され、陶醉の女神は、凍てつく大地の上に倒れ伏した。

ゼエ、ゼエ、と荒い息を吐き、風の消えた剣を杖のように突きながら、切り株にたどり着くユウマ。
小瓶をつかむと、ガクリとその膝が折れた。

「ユウマお兄様！ …… よかった！！」

泣き声混じりで駆け寄ってくる、よく馴染んだ気配。

「ほんとに…… おまえの体力は底なしだな」

呆れたような、優しい声。

振り返らなくても、わかった。安堵が身体を満たし、意識が薄れていく。

「どうせ…… 体力だけが、取り柄だからな」

小瓶を握り締め、切り株にもたれるように眠りに落ちたユウマに、アレスはへえ？ と肩をすくめた。

「体力だけ、ね……。俺からしたら、そっちこそ剣も魔法も万能で憎たらしいくらいだけどな」

潤んだ瞳を瞬かせながら、ぎゅっと次兄の頭を抱き寄せるセリナ。

「くぅ…… 穴が、塞がれていく……」

不意に耳に飛び込んできた怨嗟に満ちたうなりに、長兄と妹はハッと思いをのんだ。

「光の8神の仕業か……帰路が封じられるのは、厄介だ。オルティス、そしてアナスタシアよ」

痛みをこらえるように細かく身を震わせながら、ゆらり、と身を起こした陶酔の女神は、身構える二人に、凄絶な笑みを向けた。

「無念だが、こたびはこれまで。しかし諦めたわけではない。イシユリードに伝えておけ。そなたは妾の獲物である、たとえ逃げようとも地の果てまで追い詰め、どこまでもなぶりあげると——」
「黙れ下衆^{げす}」

閃光のように投げつけられたアレスの短剣が、その眉間に触れる寸前で、アシユベリラの姿は消えうせた。

「あれだけの傷でも、まだ死なないなんて……」

呆然と呟くセリナ。

アレスも、ギリ、と険しい表情で唇を噛み締めたが、ユウマの身体を肩にかけるように抱き起こしながら、促した。

「ひとまず、危機は去った。——サマンサ、見てるだろう？ 俺たちを、再び神界へ、頼む」

20・十六歳——決戦？（後書き）

伏線一斉回収！。

次回、最終話です。

21・十七歳 ― 重なる想い

エメラルドを溶かし込んだような澄んだ青の空間を、彼女はふわふわと彷徨っていた。

ここはどこで、自分は誰か。わからなかったけれど、どうしてもよかった。

ただ、誰かの幻が、繰り返し浮かんでは消え、消えては再び浮かび上がっていた。

それを追いかけるのに、必死だった。

あなたに、つたえなきやいけないことがあるの。

まって。おねがい。

はなしを、きいて。

――彼が好きだった。

鋭い視線も、呆れたように漏らす吐息も、すこし照れたときの仏頂面も。

不器用な優しさも、ひたむきな強さも。

長い指でチエスの駒をつまんで離す仕草。頬杖をついたとき睫毛が頬に落とす影。剣を構えたときの体の筋。

髪の毛の一本一本から爪の一つ一つまで、まばたきも、汗も、呼吸も、全て愛しかった。

『スマラチア』

こえ。

そう、彼はこんな声だった。初めて会った時から比べて、ずいぶん低くなっただけ。

愛想の欠片かけらもないくせに、どこか甘い、少しだけ鼻声みたいにかすれてて、なのによく響く声。

『スマラチア』

なまえ？

わたしの、なまえ？

もっと、よんで。

もういつかい。

もっと、もっと。

『スマラチア、帰ってこい——』

プリズムのような波紋がたゆたう遠い上面に、大きな光が近付いてくるのに気づいた。

キラキラと眩しすぎて、逃げだしたくなっただけ。

『帰ってこい——』

その声に導かれるように、彼女は泳いだ。

どんどん、光は強くなる。体がかき消されてしまいそうだ。こわい。

もう少し、もう少し……。

必死で、浮かび上がる。

手を、いっぱい伸ばしたら、少し硬い大きな手にぐいと引っ張り上げられた。

ぱつちりとクロムイエローの瞳を見開いたスマラチアだが、あまりのまばゆさにまたすぐに目を閉じた。

頭の中がグルグル回り、体に力が入らない。

重心を失って傾いた細い身体を、誰かに支えられる。

ようやく眩暈がひいて、そつと再びまぶたを上げると、息をのむようにしてこちらの様子を伺う、彼の顔が間近にあった。

カーツと体温が急激に上昇し、慌てて押しのけて身を離れたが、照れてる場合じゃなかった、とすぐに気づいた。

「ユウマ、あのね、あんたの命を狙ってる奴が……」

紡がれた言葉は、そこで、途切れた。

何がおきたのか、わからなかった。

手首をつかんで引つ張られたと思ったら、次の瞬間には彼の腕の中。

痛いほどに、抱き締められた体。

「もう、大丈夫だから」

混乱する彼女の耳元に落とされたのは、まるで半分泣いているような、囁き。

「……ごめん」

その瞬間。

スマラチアの中の堰が、崩壊した。

大きく瞳^{みは}られた瞳から、あとからあとから流れ落ちる涙とともに

「好きなの」

唇から、どうしても言えなかった言葉が、ぽろりと零れ落ちた。

「好きなの。好きなの。好きなの」

ずっと秘められていた想いは、溢れ出すと止められなくて。自分でも滑稽だと思つくらい、しがみついて、同じ言葉を繰り返した。

「ユウマが好きなの。大好きなの。おかしくなっちゃうくらい好きなの。ずっとずっと前から、どうしようもなく、好きだったの——」

しつこい、と呆れられるかと思つた。
ばか、と顔を背けられるかと思つた。

でも、この時、彼は。

「——知ってる」

そう言つて、笑つた。

この上なく、優しく。

ぼおつと彼を見上げるスマラチアに、蒼の双眸が、近付く。
初めて会ったときに彼女を射抜いたサファイアは、今、見たこと
もないような柔らかい光とけぶるような熱をまとっていた。

長い長い遠回りの末、ようやく二つの切なる想いが——唇とともに

に、重なった。

審判の月以来、一カ月半ぶりの定期会合だった。

何だか気恥ずかしかったけれど、とりあえずファッションや髪型、メイクには、やりすぎにならない程度に気合を入れて、戦闘準備万端。

「久しぶりー」

何気なさを装いつつも、意気込んで部屋に現れた星の女神に対し、ユウマの反応はいえば、一瞬だけ視線を上げて「ああ」と呟き、すぐまた読んでいた本に目を落とすという無味乾燥なもの。

（つ、つれなさすぎ……！）

あのキスは夢？ 私の妄想の産物？ とガツクリ肩を落としたが、その口元は多少の苦味を混ぜながらもすぐにゆるゆると弧を描く。

（ま、いっか。この方が、ユウマらしいもんね）

「誕生日、今日だね。おめでとう」

そう言ってスマラチアが差し出した包装紙の中身は、シンプルな銀のバングルだった。素材は一見シルバーのようだが、魔力を秘めたアイテム独特の不思議な輝きを帯びている。

はめた瞬間ぴたりと手首に馴染み、ユウマの全身に満ちる、不思議な清涼感。

「サマンサに協力してもらって、造ったの。魔除けのお守りになるから」

「これは、いいな……ありがとう」

淡く微笑まれて、スマラチアは思わず目をそらす。早口で、続けた。

「《十七の儀》は来週に持ち越されたんだっけ？」

「ああ。ベルギスもシヨックから立ち直ったようだし、仕切りなおしだ」

闇の介入と、彼ら三兄妹の使命については、月の女神から直接メゼンティアの王と王妃に説明されたようだった。

「まさかユウマ達が伝説の3神の生まれ変わりだったなんてね……」

まだ信じられない、というように、しみじみ呟くスマラチア。

『私にだけ秘密なんて、ひどいじゃない』

真相を知り、抗議したスマラチアに、リンボーラは言った。

『だって、スマラチア、幸せそうだったじゃない。ずっとずっと、自分の能力が嫌で、悩んで、苦しうだったのに、彼に会って、変わったもの。でも、その相手の正体がイシュリード様だなんて知ったら、あんたのことだから、遠慮しちゃうでしょ？ せっかく仕事も安定してきてたわけだし、そのまま何も知らない無邪気な恋愛をさせてあげようと思ったわけ。……けど、謹慎が解けたら教える予定だったのよ、ホントに！』

復活した彼女を見た時の、仲間達の輝かんばかりの笑顔を出し出す。

8神の中でも、新参者で。なんだか、みそつかすみたくて、弾かれていたような気がしていたけど、彼らも、自分のことを、大切に思ってくれていたのかもしれない――。

「スマラチア？」

「あ、ごめん、ちょっとぼーっとしてた」

取り成す様に手をパタパタ振ってから、テーブルの上に用意されたクッキーをつまみあげる。

口内に広がる香ばしさと適度な甘さを味わってから、何気ない口調で、尋ねた。

「あのさ、《十七の儀》が終わってもさ……会合、続けても、いい？」

ドキドキバクバク、激しく高鳴る鼓動を押さえつけながら、それでも一見なんでもなさそうに頬杖について答えを待つスマラチアを、テーブル越しにしばし見つめてから、彼は首を振った。

「それは無理だな」

「！」

サーッと青ざめる星の女神。

一方、ユウマは腕を組んで、淡々と述べた。

「儀式が済んだら、旅に出る。アレスもそのつもりだろう」

「……決戦に、備えて？」

「ああ」

今のままでは、巨大な敵の勢力にはあらがい得ない。

闇の神々を消滅させるには、この世界のどこかに隠された伝説の武器——神剣を、探しに行く必要があった。

それが、彼らの使命であり、運命。

「そっか……それじゃ、仕方ないわよね」

うつむいて机の下でギュッと両手を握るスマラチアに、ああ、と表情を変えずに頷くユウマ。

「だが、探索の旅とはいえ、別に連日一日中歩き回っているわけでもない」

「？」

「今までのように定期的にまとまった時間をとることは難しいだろうが……会いたくなれば、くればいい」

いつでも、とぼそりと付け加えてから、そっぽを向くユウマ。

スマラチアはそんな彼をぽかんと見つめていたけれど、徐々にその意味を理解するや、ふつふつと、くすぐったい衝動がわき上がってくる。我慢できず、吹き出した。

「もう……なんなの。あんたってば、ほんと、素直じゃないんだから」

爆笑するスマラチアに、ユウマは心底心外そうに眉をひそめた。

「おまえには言われたくない」

「そんなことないわよ。あんたには負ける」

「意地っ張りはおまえの専売特許だろ」
「あんたのお家芸よ」

埒^{らち}が明かない、と背を向けるユウマに、スマラチアはまた笑う。

こんな風に、気軽に憎まれ口を交わせるのが嬉しくて。
元の場所に帰ってこれたことが、幸せで仕方なくて。

くすくす……となかなか止められないでいたら、やがて、ため息
を一つ漏らして、彼が振り返った。

「おまえ……笑いすぎ」

呆れたようにそう言いながら、ソファに座っていたスマラチアの
上に、屈みこんでくる。

そのまま、吐息ごと全て、塞がれた。

この夜のメゼンティアは、満天の星空だった。

終

21・十七歳 ― 重なる想い（後書き）

最後までおつきあい、ありがとうございました！

2人の物語はひとまずこれで終わりますが、もしやる気が持続すればいつか、兄や妹を主役に据えた物語も書きたいと思ってます…。

感想、評価等いただければ、厳しいものでも創作の糧としていきますので、

よろしければお願いします。

――ありがとうございます！

追記。

トップページの下部にこの世界のキャラが学園に通うパラレル小説のリンクを張っておりますので、よろしかったらご一読下さいw

（ただしカップルがイチャイチャしてるだけのドタバタコメディです。）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5278p/>

星の海の人魚姫

2011年1月19日19時54分発行